

---

# モンスターハンター 《龍ノ珠》

剣十

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

モンスターハンター 《龍ノ珠》

### 【Nコード】

N1723H

### 【作者名】

剣十

### 【あらすじ】

古龍の体内から見つかった素材《龍珠》。それは属性の中で唯一現象として存在しない《龍属性》を生み出すための核だった。属性を操る武器《魔杖》。それはある龍を下すために作られた武器だった。破綻オリジナルがたくさんバトル&コメディ！

《第一話から修正作業中……。四月までには終わらせるぞ！》

## ブログ（前書き）

どうも、初投稿です。これから、週一ぐらいのペースで更新していきたいと思います。

## プロローグ

吐く息は、一瞬にして凍り付く。人間の身には寒すぎる環境だ。何の対策もしていなければ、五分と経たずに、凍え死んでしまうだろう。

フラヒヤ山脈、通称雪山。

「だから、おとなしくしてろっ!!」

白い雪の上を、青い鳥竜と、ハンターが駆け回る。

ハンターは長大な太刀を下手に構えて、素早くギアノスに肉薄した。しっかりと足を踏みしめ、勢い良く太刀を突き出す。

ギアアア

ギアノスが、一瞬仰け反った隙に、刃を上に向け一気に斬り上げた。青い鳥竜は、一瞬で、息絶えた。

「まだまだっ!!」

すばやく前転をして、後方から跳びかかってきたブランゴをかわす。ナゼルを飛び越え、無防備に背後をさらしたブランゴに、長大な太刀を大上段から振り下した。太刀を薙払いつつ、後方に跳び、ギアノスの攻撃をかわす。

「そこだあっ!!」

再び、大上段からの斬撃をギアノスに見舞った。ギアノスの体が遠くに吹き飛んだ。鳥竜の体にぶつかり、怯んだブランゴとの距離を前転で殺す。再び、大上段から斬撃を放つと、ブランゴの体は力

つき雪原に伏した。

「いきなり、モンスターの群れに遭遇するとは、思わなかったなあ」  
ナイフを取り出し、素早くギアノスの皮を剥ぎ取った。

「最近、獯猛な飛竜も出るって言うし………やだなあ」

純白の雪の上に、茶色の毛皮。駆け出しハンターの定番装備、レザーライトシリーズに身を包んだ少年は剥ぎ取ったばかりギアノスの皮を袋にしまった。

「とはいえ、報酬が1500Zなのは無視できないからな」

少年の名は、ナゼル。十五歳のハンターだ。背中には、鉄刀《楔》が背負われている。

「リンに負けてられないからな」

ぶつぶつ愚痴をこぼしながら歩いて行くと、鋭い冷気が頬をなでた。

！

ナゼルは、鉄刀《楔》の柄に手をかけた。痛いほどの殺気が、ナゼルの全身に降り注ぐ。

「……………どこだ？」

ズズ、と雪が蠢いた。白銀の甲殻に覆われた巨躯が雪を吹き飛ばし、現れる。

「ッ！」

ナゼルは、素早く自らの得物を抜きはなつた。人の身ほどの長さを持つ、鉄刀《楔》も謎のモンスターの巨軀に比べれば針の様だ。白銀の竜が、口を開いた。切り裂く様な、冷気がのどの奥で渦巻いているのが見える。

ガアアアアアアアアアアアアアアアアッ！！！！

凄まじい音波の塊が、雪山の大気を切り裂いた。揺れ動く大気は、ナゼルの耳を貫く。

「クツッ！！」

思わず耳を塞ぎ、その場に座り込んでしまう。

（その一瞬が、命取り）

高名なハンターであった父に何度も言われてきた言葉が、脳裏を掠める。

ナゼルの硬直が解けたとき、白銀の竜は、再び口を開いた。

ガアアアアアアアアアアッ！

放たれたのは咆哮だけでは無かった。空気をも凍らせるような冷気の槍がナゼル目掛けて襲いかかる。

衝撃。体が浮く。ナゼルの体を包んだのは、暗闇と浮遊感だった。遠くなる意識の中で、昔の記憶が蘇る。

（崩竜、ウカムルバス……………）

雪山の深奥にのみ、生息するといわれるハンターたちの恐怖。頂点をめざすハンターへの試練。

（いつか狩ってやる……………）

## プロローグ（後書き）

呼んだらコメントを、できるだけお願いします！

## 第一話：リユート村と氷鳥竜！

体全体が温かい。どこからか、鳥の鳴き声が聞こえてくる。

(ここは……………?)

うつすらと目を開けた。木で組まれた天井が見えた。

「おっ！目を覚ましたか」

しゃがれた男の声が聞こえた。

「ここは、リユート村。そして俺はそのハンターだ。お前は、雪山から流れてきている川のほとりで、見つかったんだ」

パイプをふかしながら男が言った。

「よかったなあ。致命傷じゃなくて。いったい何の攻撃を受けたんだ？」

煙がとぐるを巻きながら、天井へと向かっていくのが見えた。

「俺は、ナゼル。依頼の途中で、ウカムルバスに出会い攻撃を受けたんです」

そうナゼルが説明するとハンターは、驚いたように目を見開いた。力を失った指からパイプが外れ床に落ちる。木張りの床に、灰が飛

び散った。火種も飛び、ナゼルは心配になった。

(火事にならないかなあ……………?)

男は、革靴で火種を踏みつぶすと口を開いた。

「お、お前崩竜に会ったのか……………?」

ナゼルが頷くと、ハンターは驚きに目を見開いた。茶色の目が大きくなる。

「そうか……………。崩竜……………、あいつがまた現れたか……………」

ハンターはそう呟くと、パイプをポーチにしまいこんだ。

「ところで、あんたは何故雪山に?」

ハンターが、あごをなでながら聞いた。

「依頼だ。鉱石商からの依頼で、鉱石をつめる袋に使うそうで、ギアノスの皮十枚納品……………っていうな」

ナゼルはレザーライトベルトから依頼書を引き出しながら言う。

「そうか……………。まあ怪我が治るまでゆっくりと、この村で休んでいってくれ」

再び、ハンターはパイプを取り出し、火付け用の木屑と、煙草を詰めた。マッチを取り出すと、壁で擦り火をつける。

「この小屋は自由に使っていていいからな。前に住んでいたハンターは引退して、街に行っちゃったんだ。……この村には、ハンターは一人。昔、ハンター向けに貸し出していた空き家ばかりだ」

煙の向こうでふっ、とさびしそくに目を伏せると、ハンターは建て付けの悪い扉を開け去っていった。

「よしっ！あと三枚！」

大振りの解体用ナイフを取り出し、ギアノスの皮を剥ぎ取ると袋にしまった。

「今日は、大型モンスターはいないみたいだし、もうすぐ終わるな」

ナゼルは、雪山に鉱石商からの依頼を片づけに来ているのだ。すでにギアノスから、十二枚、皮を剥ぎ取っているナゼルは、レザーライトメールの背中に手を伸ばし、鉄刀《楔》を抜き放った。

「手入れしておくか……」

ナゼルは、ポーチから砥石を取り出し鉄刀《楔》の刃を研ぎ始めた。刃こぼれを均していくと、鉄刀は見る間に元の切れ味を取り戻した。

「よし……」

鉄鉱石で作られた鞘に、鉄刀《楔》を収めると、地図を広げた。

「まだ狩っていないエリアは、エリア6だな」



皮をギアノスの体から剥ぎ取りながら、ナゼルは愚痴をこぼした。倒したギアノスは二頭。よって、剥ぎ取れる皮も二枚。十二＋二＝十四。目標の十五枚には、一枚足りない計算だ。

「もう全エリア狩り尽くしちゃったよ。どこいくかなあ〜」

地図を広げ首を傾げていると

ギアア　ギアア

突然、咆哮が響き渡った。

「ん？ギアノス来たのか？」

ナゼルが振り返るとそこには緑色のトサカを持った鳥竜がいた。

「ドスギアノス!？」

ギアノスよりも一回り大きなその体。緑色のトサカ。その二つを持ったそれは紛れもなくドスギアノスだった。熟練したハンターは、この程度のモンスターからは何の驚異も感じないだろう。しかし、ナゼルにとっては十分に危険な相手だった。

「ちょうどいいな。ドスギアノスを狩って皮をもらうか」

(今の俺なら……ドスギアノスを狩れる!)

武器も抜かずに氷鳥竜のまえへ走り出た。ナゼルは、鉄刀《楔》の柄を掴むと、走り寄った勢いを乗せ勢い良く振り下ろす。

ギアア

ドスギアノスは、体をそらしナゼルの斬撃を紙一重でかわすと、氷液を吐き出した。

「くうっ！」

レザールライトメールは、氷液をあびると一瞬で凍り付きナゼルの動きを阻害する。冷気が、隙間から入り込み、ナゼルの体を蝕み始めた。

「しまっ

！？」

動きが止まった一瞬のうちにドスギアノスは飛び掛かってきた。鋭い爪は、皮の鎧を切り裂く。ナゼルの体は、宙に浮き、地面に勢い良く叩き付けられる。

「う……………」

ナゼル、起き上がり様に、目の前を薙ぎ払い後方に跳んだ。肉薄してきたドスギアノスの首に薙ぎ払いが入り、緑色の皮膚を切り裂いた。

ギアアアアアツツ

ドスギアノスは、悲鳴をあげながら、後ろに吹き飛ばす。

「この隙にっ」

鉄刀《楔》を鞘に収めると、ポーチから回復薬を取り出し、一息に煽った。活性化した細胞が、氷液によって出来ていた傷を見る間に塞いでゆく。

「ふう……………」

傷が治り、安堵した一瞬。その一瞬の隙をつき、ドスギアノスは飛

び掛かってきた。傷を負わされ、凶暴になったのだろう、その一撃は先の物とは、比べ物にならない破壊力を持っていた。

「なっ!？」

足が地面を離れ、ナゼルの体が宙に浮く。一瞬の浮遊感の後、ナゼルの体は地面に叩き付けられるはずだった。しかし、浮遊感の後に待っていたのは更なる浮遊感。嫌になるほどの長い浮遊感だった。

(崖……………?)

体中に衝撃が走った。

ゆっくりと、水がヘルムをぬらし入り込んでくる。

(川か……………)

何か手に掛かるものが無いか、掴む物が無いか、手を振り回す。濡れた手に、冷たい岩壁が触れた。氷結晶が、剥き出しになっているのだろう。触れている手が冷たくなっていく。

(早く体を起こさないと、指先が動かなくなってしまう)

グツと、痛む腕に力を込めナゼルは体を起こした　　いや、起こそうとした。

もともと氷結晶は硬い鉱石では無い。更に、川の水の流れで削れ、もろくなっていたのだろう。ナゼルの体を、支えることすらできずに、あっけなく崩れ落ち奥の空洞が、あらわになった。起こしかけた体が、再び水の中に叩き付けられる。

たまった疲労、ダメージが頂点に達し、もはや指先ひとつ動かすことが出来ない。

ナゼルは諦め意識を手放した。

## 第二話：猫と少女

「いてっ！」

濡れた顔が、雪の中に叩き付けられた。叫ぼうと開けた口の中に白い雪が入り込む。

「うわっ！」

体を起こそうと、腕に力を込めた。痛みが腕を貫き、全身を駆けめぐった。

「ッ！」

痛みをこらえ、体を起こすと、荷車を押しして駆けていく、アイルーが見えた。

（そういえば、アイルー達には倒れているハンターを助ける仕事をしている者がいると聞いた事があるな……。そいつらの世話になったと言っ訳か……）

「運がよかった……。あのまま溺れていてもおかしくなかったはずだ……」

おそらく、もう二度は無い。今度、力尽きてしまったらもう終わりだろう。

「装備は、まだ未熟だし……。今回は、一度引いた方がいいだろ

う

そう考えたナゼルが、迎えの馬車を呼ぼうと、花火銃に手をかけた瞬間

「ニヤアアアアアアアツ!!!?」

突然、アイルールの悲鳴が響き渡った。そして、ガラガラと荷車を引く音。そのすべてがエリア1から聞こえてくる。

「何だっ!?!」

ナゼルが、拠点を走り出るとそこには 戦場が広がっていた。

いつも、マンモスに似た草食モンスター、ポポがのんびりと草をはみ、安穏とした雰囲気か漂うエリア1。しかし、今は

ギアア ギアア

鳥竜種特有の鳴き声がひびき、ポポが血を噴き出し、土煙を上げながら倒れる。どこにこんな数のギアノスがいたのか、たくさんギアノスが飛び回っている。その、間を縫うように荷車を引く一匹のアイルールが駆け抜ける。

「ニヤニヤニヤニヤニヤニヤ !!!」

本来、四匹で引くための荷車を一人で引いているため、アイルールの顔は真っ赤にそまり息は荒い。助けなければあつというまにギアノス達に狩られてしまっただろう。

「たくつ、見殺しにするわけじゃないじゃんかっ!」

ナゼルは鉄刀《楔》を抜き放つと、アイルーの背後に迫っていたギアノスに勢い良く振り下ろした。

「ニヤツ!？」

逃げるのに精一杯で気付かなかったのか、アイルーの目が大きく見開かれ、その動きが一瞬止まる。

「止まるなっ!!逃げろっ!!」

ナゼルが、突きを繰り出しつつそう叫ぶと、それに呼応するかのように一際大きな咆哮があがった。

ギアアアア

「この咆哮はっ、ドスギアノスッ!!」

音源は、ポポの向こう。鉄刀《楔》を一旦鞘にしまうと、ナゼルは倒れゆくポポの背中を蹴り、思い切り跳躍した。土煙の向こうに緑色のトサカが見えた。

「リヤアアアアアアアッ!!!!」

空中で鉄刀《楔》を抜き放ち、落下の勢いも乗せて勢い良く振り下ろした。

斬撃が、ドスギアノスの首に食い込む。血飛沫が飛ぶのも構わず、そのまま突きを繰り出した。刃を上に向け斬り上げ。

ギアア

ドスギアノスが、苦しげに仰け反った瞬間、ナゼルは背後を確認した。アイルーは、荷車を引き、拠点への道に走っていく所だった。しかし、ギアノス達の連携に阻まれ思うように進めていない。

「　　ッ！」

腹に凄まじい衝撃が走った。アイルーに気を取られているうちに、ドスギアノスが攻撃を仕掛けてきたのだ。気絶していた間に、少しは回復していたもののドスギアノスから受けていたダメージはまだ消えていない。ガクツ、と足の力が抜ける。

「　　らあっ！」

無理矢理に体を転がし続いて、繰り出されたドスギアノスの爪を避ける。

ポーチから回復薬を取り出し、一息に煽った。体中の痛みが、わずかに軽減された。だが、まだまだ万全の状況とは言えない。前転して、ドスギアノスとの距離を稼ぐと再び回復しようと、回復薬グレートを取り出した、その時

「ニギヤアアツ！！！」

突然、背後からアイルーの悲鳴が上がった。

「　　！？」

振り向いたナゼルの目に、倒れたアイルーが映った。ギアノスの攻撃が、かすってしまったらしい。

荷車が横転し、乗せられたハンターが地面に投げ出されている。銀

色の長髪が、草の上に広がった。無防備なアイルーと、ハンターにゆっくりとギアノス達が近づいていく。ギアノスが、ゆっくりと口を開く。倒れたアイルーの頭に、顔を近づけた。

「させるかつ!!」

全力で、ギアノスに駆け寄った。鉄刀に練気を叩き込み、思い切り振り抜いた。気刃斬りを、受けたギアノスは遠くに吹き飛んだ。

「早く起きろっ!!」

土で汚れたアイルーの顔が上がった。ナゼルが見ていない間に攻撃を受けてしまったのか、顔の皮膚が裂けている。

「これで、回復して逃げるんだっ!!」

手に持っていた回復薬グレートを差し出した。

「これは、そっちのハンターの分な」

ポーチから、もう一つ回復薬グレートを取り出し、アイルーの手に握らせた。これで、もう回復薬は無い。

「ありがとうニャ」

アイルーは、そう言うのとハンターを荷車に乗せ直した。拠点に向かって進みはじめる。もう走る体力は無いのか、ゆっくりと歩くだけだ。

「よし!後は、俺があいつらを倒せば……………」

ナゼルは、鉄刀《楔》を抜き放ちギアノス達に向きはなった。敵のギアノスは、合計五頭。

体力は、もう残り少ない。あと一撃でも喰らえば、動けなくなってしまう。

（あいつらが逃げる時間だけでも稼げば……………）

一番近くにいたギアノス目掛けて、突きを放った。足を踏みしめると斬り上げ。大上段からの一撃を見舞うと、烏竜は力尽きた。

（あと四匹……………）

目の前を薙ぎ払い、突っ込んできたギアノスを吹き飛ばす。ギアノスの体は、岩盤に叩き付けられると動かなくなった。

（あと三匹……………）

練気を、乗せた刃を勢い良く振り抜いた。飛び込んできた二匹のギアノスが、同時に首を叩き斬られ、絶命する。

（あとは、ドスギアノスだけ……………）

気刃斬りで崩れた、体勢を立て直すとドスギアノスに向き直った。背後を見ると、アイルーはもうすぐ拠点に着くところだ。

（もうすぐだ……………）

氷鳥竜は、体を縮ませると飛び掛かってきた。素早く前転をして避ける。背中を爪がかすった。ドスギアノスが、ナゼルの背後に着地

した。そして  
再び体に力を込めると、アイルーの背中に飛び掛かった。

「！」

音に気付き、振り向いたアイルーの顔が恐怖でゆがんだ。影がかかる。ザク、と肉が斬られる音が妙に生々しく響いた。

「…………ッ」

ドサリと、ナゼルの体が地面に伏した。背中から血が止めどなく流れる。ドスギアノスの動きが一瞬止まった。

「この……………すき……………に、逃げ……」

ナゼルの口が動いた。弱い声が、雪山の大気を震わせる。

「……………ありがとうニヤ」

アイルーは、荷車を引き拠点の中へと入っていった。拠点には、モンスターが入り込まないよう細工がされているため、拠点に逃げ込んでしまえば大丈夫だ。

（良か……………た……）

考えることすら、辛い動作だ。ドスギアノスが、目に怒気と殺気を浮かばせて、ゆっくりと近づいてくる。

（もっ…動かな……………）

カピア、とドスギアノスが口を開いた。喉笛を噛み切るごと、口を首に近づけてくる。

(も……………う…ダメか……………)

ナゼルは、静かに目を閉じた。その時、

パアアンツ

ドスギアノスの頭で、雷が弾けた。

ギアアアアアツ

氷鳥竜が、顔を雷が来た方向に向けた。その目には、新手への強い殺気が宿っている。

そこ。拠点の入り口には、少女が立っていた。手には、白い杖を持っている。銀色の髪、碧い目。アイルーが助けていたあの少女だ。

ギアア

ドスギアノスが、飛び掛かろうとしたその時。パアアンツ

杖から、氷鳥竜の頭目掛けて雷がほとばしった。

パアアンツ パアアンツ

次々と、雷が弾ける。

ドスギアノスが、少しずつ後ろに下がる。ダメージが蓄積してきたのだ。

フアアアツ

少女が、杖を胸に抱いた。少しずつ杖の先の宝玉が光を増していく。その間は、無防備に動きが止まったままだ。その隙を氷鳥竜が見逃すはずもなく、勢い良く飛び掛かる。

次の瞬間

「ニャアアアアアアツツ!!!」

アイルーが、現れ棒切れを勢い良く振りぬいた。宙に浮いたドスギアノスの体が吹き飛ぶ。同時に、折れて空に飛ぶ棒切れ。  
ギアア

氷鳥竜が倒れた瞬間、少女が杖を振り下ろした。そして

ドオオオオンツ!!

山が崩れたのかと思うような轟音が響き、大木ほどもある大きな雷が落ち、ドスギアノスの体を貫いた。

そして、もう二度とドスギアノスは、立ち上がることは無かった。

氷鳥竜が、地に伏したのを見ると少女も力を使い果たした様に、パタリ、と倒れてしまった。

「大丈夫かニヤツ!?!」

その、後ろからアイルーが駆けてきた。ナゼルの口に渡した支給品の応急薬を流し込む。

フツ、と傷が治るのが分かった。痛みが、どんどん引いていく。

「ああ、大丈夫………だ」

何とか自分だけで立ち上がることが出来た。

「それより、その子は大丈夫か………?」

倒れてピクリとも動かない少女を、見てナゼルは聞いた。

「大丈夫だと思うニヤ。傷はないし、多分疲れたただけだニヤ」

アイルーはそう言うと、少女の所へ駆けつけた。手首を取り、脈を調べる。

「大丈夫だニヤ。アンタはさっさと、そのドスギアノスから剥ぎ取るニヤ」

ガタリ、と少女を荷車に押し上げながらアイルーは言った。少女の銀色の髪が垂れ、長い耳が露わになった。

「竜人族か……。あの武器は一体なんだったんだろう」

ナゼルが、呟いた。すると、アイルーがイライラした様に言う。

「そんなことはいいからさっさと帰るニヤ」

「はいはい、分かったから」

大振りの剥ぎ取り用ナイフを取り出すと、ドスギアノスから皮を剥ぎ取った。

「依頼完了っ!!」

### 第三話：休息（前書き）

すいません、更新遅れました〜。  
いろいろあって……言い訳はしません……。

### 第三話：休息

「あ~~~~やつと来たあ〜」

ナゼルが疲れたように、声を上げた。クエスト完了の印である、火花を上げてから馬車が来るまで、約十分。疲れていた体には、長い時間を感じられた。

「まったくトロい連中だニヤ」

アイルーが愚痴をこぼした。荷車の柄を地面に置き、ぐったりとしている。普通ならピンを立っているはずのひげも、力を失い垂れている。

「帰るか……………。お前も、村に来るのか？」

ナゼルが、馬車の扉に手をかけて言った。

「ニヤツ！！ボクは、オトモなのニヤ！雇い主がいないから、お金貯めてきたニヤ。生活費は貯まったから、村に行つて雇い主を探すニヤ」

アイルーが、荷車を馬車の後ろに繋ぐ。

よいしょ、と入り口に短い足をかけて乗った。アイルーがポン、とソファアの上に飛び乗る。ナゼルが扉を閉めると、馬車が動き出した。

「アンタ、ボクを雇えるかニヤ？」

アイルーが突然ナゼルに聞いた。ナゼルは、ゆっくりと考えるように口を開く。

「……無理だね」

「……………」

沈黙が、場を制した。それに耐えきれなくなったアイルーが口を開く。

「おいニヤ！助けてくれたアイルーが、雇って欲しいと言ってるニヤ！普通、即座に『雇う』っていうのが普通だニヤ！」

怒鳴り声が、馬車の中の空気を震わせた。

「雇わないと言っのなら……………」

アイルーが、腰の樽の中に手を入れた。小さな玉を取り出し、紐を引く。

キュボムツ！

一瞬で膨張し、それは、小タル爆弾になる。さあっと、ナゼルの顔が青ざめた。

「小タル一個程度、平気だよ」

そついう声が微妙に震えている。アイルーが、眉を上げた。

「お、大きい方が好みかニヤ？」

再び、樽の中から玉を取り出す。紐を引けば、一瞬で大タル爆弾が、

馬車の中に現れた。

「扉に近いのはボクの方ニヤ。ここで、小タルに火を付けてもボクはすぐに離脱できるニヤ。だけど、アンタは……………」

ニヤリ、とアイルーが笑った。(後日、ナゼルは『この時、アイルーがウカムルバスよりも恐ろしく見えた』と語っている)

「……………しょうがないなあ。雇えばいいんだろっ！雇えば」

ニヤ、とアイルーが笑った。大タル爆弾を馬車の外に放り出す。

「ボクはファル、雇ってくれてありがとニヤ(ニヤリ)」

笑う猫と、戦慄する狩人を乗せて馬車は進んでいった。

「帰ってきたか、ナゼル」。雪山で、ドスギアノスが出たと言っておったから心p……………ん？そのアイルーは？ハンターもいるじゃないか」

村長が、杖に寄りかかって進んできた。

「ボクはファルニヤ。オトモアイルーニヤ」

ペコリと、ファルが頭を下げた。ナゼルを脅迫していた時の、面影は何処にもない。村長が感心したように、目を細める。

「ほう、オトモとな……………」

村長が、ゆっくりとファルに近づいた。一瞬、村長の周りに風が巻き起こる。

タンツ！

突然ファルが吹き飛んだ。村長が、杖でファルを吹き飛ばしたのだ。

「……………ふむ」

村長は吹き飛ばされ目を回している、ファルに背中を向けた。軽く手を振って、少女を空き屋に連れて行かせると焚き火の横に座り込む。

「ナゼル。キッチンを貸してやるから、そのアイルー……………ファルといったか、そいつを修行させてやれ」

それだけを言うと、村長はあくびを一つして目を閉じた。

アイルーキッチン。ハンターが、アイルーを雇う際に、用意すべき場所である。だが、リユート村には、そんな高級な場所を作る材料は、少ない。そのため、ハンターは村長が作ったキッチンを、借りているのだ。

「ニャー！！よろしくニャツー！！」

ファルが、ペコリと挨拶をした。そのまま、ピヨコンとテーブルから飛び降りる。リーダー格らしい茶色のアイルー、オスティがファルに近づいてきた。

「キミは……オトモ志望だったよニヤ。コテンに、教えてもらってくれニヤ」

オステイが、ファルの手を引いていく。そこには、蒼の毛並みをしたアイルーがいた。雌火竜の牙を詰め込んだピツケルを持ち、素振りをしている。

「コテン！」

オステイが、呼ぶとそのアイルーは振り返った。コテン、というらしいそのアイルーはピツケルを地面に置く。

「この、ファルを教えてやってくれニヤ！ファル、こっちはコテン。アイルーでありながらハンターと認められたすごいアイルーなんだニヤ」

ファルは、目を大きくして驚いた。コテンは、恥ずかしそうに体を縮めている。

「それって、自分で狩りに出れるって事ですかニヤ？」

ファルが、聞いた。コテンが頷く。

「ボクは、世界で五匹のアイルーなんだニヤ」

その言葉に、ファルが再び目を大きく開いた。オステイが、パタパタと手を振る。

「そんな事は良いからコテン、頼んだニヤ」

オステイは、それだけを言うとキッチンに走っていった。

「よろしくですニャ」

ファルが頭を下げる。すると、コテンは頷きピッケルを差し出した。

「まずは、素振り千回ニャ！素振りは全ての基本だからニャ！」

コテンはそういうと、太刀を取り出した。希少なカブレライト鉱石を大量に使い、大地の結晶で研磨加工した一品だ。龍属性を帯びているのか黒い気が刃を包んでいる。ハンターでも、手に入れるのは難しいー振りだろう。

「ボクも一緒にやるからニャ」

コテンはそういうと、太刀を大上段に振りかぶった。ファルもあわててピッケルを構える。

「イチッ！ニッ！」

コテンがカウントを始めた。一つ数える事に、武器を振り下ろす。

「声出していくニャ！」

二匹の素振りは、しばらく続いた。

「これは……………」

村長は、驚きの声を上げた。手にしているのは、白い杖。先端には、氷を削ったように透明な宝玉があしらわれている。

「太古に発明されたと言われる伝説の武器。使う者を選ぶという意味を持った得物」

村長が、杖を軽く振った。その瞬間、命が吹き込まれたかのように宝玉が赤く光り出す。

「  
《魔杖》」

その言葉に反応するかのように、光が脈打った。僅かに、熱気があふれ出し杖の周りを包む。

「何故こんな物を……………」

村長は、視線をベッドに移した。そこには、白いローブを身にまとった銀髪の少女が寝かされている。疲れ切っているのか、眉をしかめ苦しそうだ。髪が落ち、長い耳　　竜人族の証が露わになる。

「……………姉御は、『これ』を使えたはずじゃ」

村長は、杖を柵の中に戻すと、部屋を出ていった。

## 第四話：目覚めと記憶と猫の陰謀

「ご主人〜！あの子が目覚めたらしいニヤ〜！」

ファルの声が、響いた。ナゼルが、ベッドの中から顔を出した。どろろと寝ている間にまとったファルが、汚れた床の上でピョンピョン飛び跳ねている。

「え〜？あ……………ああ、あの子か」

ゆっくりと、ナゼルが起き出した。マカライトブルーのインナーの上から、レザーライトシリーズを装備する。

「村長が、一回来いって言ったニヤ〜！」

とファルが、ナゼルに伝言を告げる。

「そうだな……………。装備を受け取りがたら、見舞いにも行って来るか」

前回の依頼で、報酬として受け取った鉱石でバトルシリーズを注文していたのだ。それが出来る日は、ちょうど今日。簡素な作りのため、一日で出来上がったのだ。また、鉄刀《楔》を、《神楽》への強化も頼んである。

「そうニヤ〜！早く行くニヤ〜！」

ファルが、ピョンピョンと飛び跳ねている。ガチャガチャと、どろろと音が音を立てている。そこで、ナゼルは初めて気が付いた。「なんで、どろろと音を立ててるんだ？」

ナゼルに、どろろと音を聞いて与えた覚えは無い。それに、アイフル用の小さな防具とはいえ、それなりに高価な物だ。2000Zくらいはする。

「なんか、キツチンで先輩がくれたニヤ〜」

盗んだわけでは、無いと分かりナゼルはほっ、と息を付いた。あら

ためて見ると、マイルには傷が付き、駆け出しのファルでも歴戦のアイルーの様に見える。

「ファル、なんか強そうに見えるよ」

ファルが、腕を組んだ。窓の外を眺め、できるだけハードボイルドな表情を作ろうとしている。が、ほめられた喜びに頬がゆるんでいる。

「まあ、さっそく出ようか」

ナゼルは、ドアを開けてリユート村に出た。ナゼルの家は、村の中心付近にあり、工房などの施設にとても近い。家を出て、二、三分の距離だ。その間には、藁葺きの家があった。低い藁葺きの家の屋根。その町並みの中、工房の高い煙突はとても目立った。

「親方あゝゝ！」

ナゼルは、声を上げた。ドアを開くと、熱気が噴き出てくる。カンカン、と大柄な男が鎚を振るっている。

「おう、ナゼルか。バトルシリーズは、出来てるぞ。今は、鉄刀《神楽》の仕上げをしてる所だ」

薄いチョッキに、右手に火竜の手袋をつけた親方は、カブレライト鉱石で出来た鎚を振るって、鉄刀《神楽》を鍛えていた。

「着替えてるか？それとも、ここで見てるか？」

親方は、鉄刀から目を離さずに言う。深紅に染まった刀身にマカライト鉱石が、少しずつ同化していく。ファルは、その様子から目を離せないようだ。

「着替えてくるよ」

ナゼルは、工房の横にあるドアを開けた。そこには、バトルシリーズが一揃い置いてあった。鹿に似たモンスター、ケルビヤ、猪の様なファンゴの毛皮を主に使い、要所を鉄鉱石と円盤石で強化したその装備には、自らを鼓舞し攻撃力を上げる能力がある。

ナゼルは、レザーライトシリーズを、脱ぐとバトルシリーズを装備した。皮の防具を、揃えて置くと、ドアを開けて工房にでる。丁度親方は、焼き入れを終わらせた所だった。

カシリ、と親方が鉄刀《神楽》を鞘に収めた。黒い紐を鞘に巻くと、鉄刀《神楽》をナゼルの手に渡す。

「出来たぞ！何か変だったら言ってくれな」

鉄刀《神楽》を背中に背負うと、ナゼルは工房のドアを開けた。

「サンキュ。親方、また頼みにくるからその時はよろしくな」

おう、と手を上げる親方を背に、ナゼルとファルは村に出ていった。

「ここニヤ！」

ファルが、家を指さした。煙突から、ポツポツと煙が立ち上っている。

「ここに、あのハンターがいるはずニヤ！」

ファルが、どんぐりメイルをカシヤカシヤと鳴らして、飛び跳ねた。家は、ナゼルの家と同じ簡素な作りだ。ナゼルは、木の扉をコンコン、とノックした。

「……お邪魔しまあゝす（ニヤ）」

カチャリ、扉を開ける音はとても静かだ。自分の家とは違い手入れされているようで、ナゼルは少し、羨ましくなった。

「お、ナゼルか」

中の作りは、ナゼルの家と全く同じだ。扉を開けて、右側にベッドがあり左側に、道具をしまう箱がある。その箱の上に村長が腰掛けしていた。ベッドの上には、あの少女が寝かされている。

「その娘、さつきまで起きていたんじゃが、また眠ってしまったのじゃ」

ナゼルの視線の行方から、何を考えているかを察して、村長が説明する。ナゼルが、頷くと村長は、箱の上から飛び降り奥にある、据え付けの棚に向かった。

「おまえさんと呼んだのはな、少し頼みがあつての事じゃ」

村長は懐から、鍵を取り出し南京錠を開けた。キィ、と音を立ててドアが開いた。その中には、少女が握っていた、白銀の杖が入って

いる。

「それは、あの子の武器じゃないですか」

あの、炎を先端から走らせていた杖。かなり弱っていたとはいえ、中型モンスターを、一撃で葬ったあの杖だ。赤く輝いていた宝玉は、光を失いたただの透明な水晶と化していた。村長が、口を開く。

「これは、魔杖と言つてな。太古に作られ、使う者を選ぶという不思議な武器なのじゃ」

杖が、わずかに光り始めた。

「これは、僕にも使いこなせぬ。僕の姉御はこれを自らの武器としていたがな。僕に出来るのは、ほんのこの程度」

村長が、印を結ぶかのように空中に杖で、線を引く。

「傷ついた者を癒す程度の事だけじゃ」

パアアアツ！

透明だった宝玉が、やさしい緑の色に輝いた。その光が、すこしずつ少女の体に移っていく。そして、光が消えたとき

「……………ん？」

少女が目を覚ました。髪の色に似た、碧い目で不思議そうに辺りを見回す。その視線がナゼルの所で止まった。

「あなたは誰？」

少女が首をかしげて、聞いた。村長が、説明しようと口を開く。

「そいつは、ナゼル。主を連れ帰ったハンターじゃよ」

「へえ。ナゼル。私の名前は、シイナ。よろしくね」

少女が口を開き自己紹介をした。村長とは、すでに顔見知りの様子だ。ナゼルを見ていた視線が、下がりファルを見付けた。

「オババ様、このアイルーは？」

再び、首をかしげて村長に質問する。村長が、口を開く前にファルが、驚いたように口を開いた。

「ニヤアツ！？助けてあげた恩を忘れちゃったのかニヤアアアツ！

！！？じゃあ……………お金は貰えないのかニヤアアアアアアアアアアア

……………」

ファルはそう叫ぶと、泣き出した。助けた事で、代金を貰おうと考  
えていたようだ。

「その金は、ギルドから出てるだろ……………」

ナゼルが、ファルをにらみつけた。ファルが、泣きながら言う。

「あれっぽっちの金じゃ、全然潤わないニヤツ！別に良いニヤろツ  
！ネコだっってお金が欲しいんニヤよツ！」

ファルは開きなおると、再び泣き始める。村長は、あきれた様にフ  
アルを見ると、気を取り直して説明を始めた。

「これは、ファル。オトモ見習いのアイルーじゃ。又シを助けたの  
は、このファルじゃよ」

ふう〜〜〜ん、とシイナが首を傾げる。

「そんな記憶無いけどなあ」

ポツリ、と放たれたシイナの言葉に反応し、ファルが更に激しく泣  
き始める。

「……………少し眠れ」

ナゼルは、腰のポーチに手を突っ込んだ。捕獲用麻醉玉を取り出し  
ファル目掛けて投じる。強大なモンスターには、弱らせなければ効  
かないが、小さなアイルーには一つ投じるだけで十分だった。

「ニヤアアアア」

ファルは、発生した白い煙を吸い込みパタリ、と眠りについた。

「……………眠っておけよお」

ニヤリと、ナゼルが笑った。シイナは、驚き目を見開いている。村  
長は、溜息をついた。

「さて、ナゼル。頼み事とは、このシイナの事でな」

村長が切り出した。ナゼルは、ファルをベッドの下に放り込み、村  
長に向き直る。なぜか、シイナも姿勢を正した。

「シイナは、記憶喪失らしいのじゃ。残っている記憶は名前と

村長は、シイナに言うよう促した。シイナが、口を開く。

「真っ赤の所、たぶん溶岩が流れている所に居るの。私は、杖を手

に持っていて周りを。なにか、すごく恐ろしいモノが居ることだけが分かっていて……。後ろで、突然音がしたかと思ったら、吹っ飛ばされて、それでこの記憶はお終い」

シイナは、口を閉ざした。今にも、その恐ろしいモノが襲いかかってくるかのように周りを見回す。再び、シイナが口を開いた。

「もう一つ。妙に寒いところに居る記憶。まわりが、氷で覆われて居るみたいになっているの。真っ暗で、怖くなって叫んだけれどどこからも返事が返ってこなかった。ただ水が流れている音だけが聞こえてくるの。そこで、急に眠くなって眠ってしまう。それで終わり。その二つしか覚えてないんだ」

シイナが、話し終わると村長が口を開いた。

「おそらく、シイナは昔ハンターだったのじゃろう。そこで、又シに頼みがあるんじゃない」

## 第五話：ただいま修行中！

「モンスターと、突然遭遇してしまつたらどうすればいい？」

「ここは、訓練所。駆け出しのハンターを育成するための場だ。ハンターを引退した、教官が教えてくれる。ギルドからの資金で運営されているらしい。」

「……………とにかく、攻撃して反応を見る、かな？」

と、答えるのはシイナ。教官の基本講義を受けているのだ。

教官が、首を振った。

「違う。一撃離脱をくり返し、敵がどんな動きをするか、その予備動作は何か。それを観察するんだ」

今、教官が教えているのはハンターの基本。生き残るのに、一番大切な事だ。

「はい、分かりました」

ペンを取り出し、ノートに書き込む。

「はい、今日の講義はお終い。ここからは、実技の講義な。闘技場に出てくれ」

教官は、黒板を倉庫にしまうと鍵を取り出した。ドラグライト鉱石で出来た鎖で、嚴重に縛られた門を開ける。鉄の的を六つ、倉庫から出し闘技場に固定した。

「狙撃訓練だ。お前の武器は……………」

教官が、シイナの持つている武器を見て首を傾げた。

「魔杖です。武器の分類としては、ガンナータイプになるそうです。シイナが、杖をかまえて言った。宝玉が、赤く光る。」

「魔杖か。希少な武器ではあるが、ギルドのマニユアルに……………お、あつた。『魔杖：ガンナータイプ。宝玉を杖の先に固定する事で、属性値のみでの攻撃を可能とした武器。攻撃をする際に、力を

封じた珠を装填しなければいけない。代表的なものとして、攻ノ珠、爆ノ珠などがある。また、スタミナを消費する事で力を集中させ、爆発的な威力を生み出すことができるらしい。この武器を使用するには、特殊な才能が必要なため、愛用者は少ない。訓練方法：他、ガンナー型武器と同じ。『ふむ……………』

教官が、あごをなでた。手を振って、シイナに闘技場に出るよう合図する。

「わしは、弓使いを教えたことがあるから、そのやり方で行こう」教官が、シイナに高台に上る様に、指示をした。袋を取り出し、シイナに手渡す。教官は、その袋のなかから、白い珠を取り出した。「これは、攻ノ珠【壺】。ボウガンでいう、LV1通常弾のようなものだ。これを、宝玉の下にある穴に詰め込む事で、発射が可能になるらしい。……………また、選んだ珠によって装填できる数が変わるみたいだぞ」

カシリ、とシイナが珠を杖に込めた。

「この、魔杖……………。オババ様によると『スノウワンド』には、攻ノ珠【壺】が四発装填できるみたいです」

シイナが手際よく、攻ノ珠【壺】を装填していく。宝玉が、白い光を放ち始めた。

「応用的な技術は、村長の姉にお願いする。わしの仕事は、それまでに基本を完璧にすることだ。では、撃てえっ！」

シイナが、杖を振り下ろした。白い衝撃波が走り、的に命中した。

「命中っ！」

パアアンツ、と音がして衝撃波が弾けた。

「次は、連射！全弾、別的的に命中させるようにっ！」

シイナは、杖をかまえたまま、3つの衝撃波を連続して放つ。そのうち、2つの衝撃波は的の中心に命中したが1つは、的をそれ壁にぶつかって弾けた。

「す、すみません……………」

シイナが、あわてて謝った。教官がジロツ、とシイナを睨む。

「お前に渡した、攻ノ珠【壺】も安価とはいえただではないんだ。外したなら、その分学習しろよ」

「は、はい……………」

シイナが、返事すると教官は的の方に向き直った。

「全弾、命中するまでは今日は終わらせないからなッ！覚悟しろよッ！」

「ハイッ！」

シイナは、ポーチから攻ノ珠を取り出し、再び装填した。

「終わったあ~~~~」

シイナは、ベッドの上に手足を投げ出した。助けられた時に来ていたローブから、ワイルドアイルのインナーに着替えている。

「疲れたあ~~~~」

ここは、シイナの家。村長から、空き家を譲り受けたのだ。端の箱には、スノウワンドと、教官からもらった攻ノ珠【壺】が入っている。

コンコン、とドアがノックされた。シイナは、ベッドに寝転がったまま声を上げる。

「どおぞお~~~~！」

キィ、と扉を開けたのはナゼルと、ファルだった。

「よー！」

どうやら、依頼を終えて帰ってきたらしい。ずいぶん簡単な依頼だったのか、六時間程度で帰ってきた。

「今日の訓練、終わったのかニヤア？」

ファルが、聞いた。シイナは、上半身だけを起こし頷く。

「もう、終わったよお」

そういうと、ナゼルは頷き、依頼書を取り出しテーブルの上に広げた。

「ちょうどいい。ちょっと、依頼を手伝って欲しくてな」

シイナが、よいしょ、と体を起こしテーブルのそばに歩み寄り椅子に腰掛ける。

「大猪、ドスファンゴ………?」

シイナが、首を傾げた。ナゼルが、頷く。ファルは、椅子の上に立ち一生懸命に、依頼書を覗き込んでいる。

「そつだ、捕獲が条件っていう面倒な依頼でな。手伝って欲しいんだ」

ナゼルが、そう言うときシイナは頷いた。

「うん、教官にもそう言っ行って行かせてもらうね」

それを聞くと、ナゼルは依頼書を丸め立ち上がった。ファルも、椅子から飛び降りる。

「出発は、二日後ね。場所は、沼地。初狩りなんだから、しっかり準備整えとけよお〜」

そういうと、ナゼルは手を振りながら家の外に出ていった。パタン、と扉がしまるとシイナは、棚に歩み寄った。中から、財布を取りだした。ケルビの皮で作られていて、丈夫な作りになっている。

「防具を注文しとかなきゃね………」

駆け出しのハンターに支給される、Zは1500。さらに、村長から2000Zもらっている。

「3500Zじゃ、いい防具は買えないなあ……。まあ、しょうがないか」

財布の中身を、確認するとシイナは村に出ていった。

「お、重い………」

ガチャリ、と防具を部屋の奥に置いた。選んだ防具は、チェーンシリース。頭、腕、胴、腰、足、全ての部位を買った合計で3000Zだ。余りの、Zは珠や、回復薬、ホットドリンクなどを買うのに

使用してしまい、

「お金、無いよお……………。5Zで、なんか食べられるかなあ？」

無論、その程度では、食事などする事は出来ない。

「ひとまず、キッチンに行ってみよう……………」

キッチンには、知り合いがいるからなんか恵んでくれるだろう。そんな凶々しい事を考えながら、シイナは共同キッチンに向かった。

「おしつ！行こうっ！！」

今日は、ドスファンゴ狩りの当日。村の出口には、チェーンシリーズを装備しスノウワンドを手に持ったシイナと、バトルシリーズと鉄刀《神楽》を装備したナゼルが立っていた。

「元気だなあ……………」

張り切っているシイナに反して、元気の無いナゼル。その原因というのは

「あんた、人の飯を勝手に食ったのに詫びは無いのか？」

“超”が付くほどに、貧乏な状態のシイナはキッチンに向かい、食事していたナゼルの食事を食い荒らしたのだ。

「あ！ごめん、ごめ〜ん。おなか減ってたからさあ〜」

全然謝る気もなく、笑い続けるシイナ。どんぐりメイルを装備し、骨ピツケル（コテンから借りていたレイアピツケルは返却）を背負ったファルが、哀れそうにナゼルを見る。

「あれは、哀れだったニヤ〜。唯一残っていたのが、スライスサボテンのサラダだったんだよニヤ」

「野菜とか苦手なんだもん！」

シイナ目掛けて、殺気あふれる視線を投げつけるナゼル。その手が、鉄刀《神楽》の柄へと伸びる。ファルが、あわてて止めに入った。

「過去の事は、忘れて出発ニヤッ！！」

第五話：ただいま修行中〜！（後書き）

モンハン3楽しみですね〜。

スラッシュアックスでは、“剣”と“斧”を切り替えながら戦闘ができるそうですね〜。

しかも、“剣”でなら、《属性解放突き》なるものが使用できるとか。ますます、楽しみになってきました。

## 第六話：初狩獵！

「着いたニヤア~~~~」

ファルが、声を上げた。ガタガタ、と音を鳴らして馬車が遠ざかっていく。村から、この狩り場までは五時間程度。

「ふああ……………よく寝たあ」

シイナが、伸びをする。ナゼルは、即座に支給品の入った箱までダツシユし、携帯食料を口の中に詰め込む。シイナの目が驚愕に見開かれた。

「あああああつ！！それ、私のっ！！」

さつきまでの眠気は、どこへやら。悲鳴を上げ、ナゼルに向かって突進した。

「別に良いだろ、俺の食ってたんだから……………おわあっ!?!」

満足そうに、腹をなでながら言い訳をするナゼル。その足下で、衝撃波が弾けた。

「……………死に方は選ばせてあげる。感電死？それとも爆死？」

物騒な事を、つぶやきながらシイナはスノウワンドをかまえた。その先は、あやまたずナゼルの胸を狙っている。

「ちよっ……………！待てよっ！！それだけで、殺す気かっ!?!」

ナゼルは走り、岩の後ろに隠れた。岩に衝撃波が弾ける。

「……………当たり前じゃん。食べ物への恨みは怖いんだよ？さっさと諦めな？」

連続して、衝撃波が弾ける。次の瞬間、岩が砕け散った。欠片が、ナゼルの頬をかすめる。うつすらと血がにじんだ。スノウワンドをかまえた、シイナが全身から殺気を立ち上らせる。（ファルは、すでに退避済み）

「ちよ……………！ううわあああああつっ!?!」

沼地に、ナゼルの悲鳴がこだました。

五分後、シイナが理性を取り戻した。ナゼルの体力は、残り10。

「あ……………危なかった……………」

とっさにけむり玉を使用し、姿をくらましたのだ。煙のおかげで、シイナが理性を取り戻すまで生き延びる事ができた。

「お前、マジ殺モードだったからなあ……………」

うらめしげに、シイナを睨んだ。

「あは ごめ〜ん！」

「あは、じゃねえよ……………」

ファルが、騒いでいる二人を睨む。

「かなり時間を、無駄にしてみましたニヤ！さつさと行くニヤ！」  
主人は、あれぐらいで疲れるなんて体力が無さ過ぎニヤ！」

さつさと逃げ出していたファルに言われ、ナゼルが殺気を放った。

「……………逝かせてやるうか？」

カチリ、鉄刀《神楽》が音を立てる。

「まあまあ、早く狩って帰ろ〜！」

シイナが割って入り、ひとまずその場は終了した。

「何処にも居ないなあ……………」

シイナが溜息をついた。ここは、エリア8。枯れ草が、生い茂っている所だ。

「本当にいない……………。ちょっと休憩しよう」

ポーチから、こんがり肉を取り出した。辺りの枯れ草を薙ぎ払うと、ナゼルは腰を下ろした。

「もう、疲れたニヤア〜！」

ファルが、ピッケルを地面に突き刺した。携帯食料（シイナとは、交渉済み）を腰のタルから、取り出し口の中に放り込む。

と、その時

枯れ草が揺れる音が聞こえた。ガサツ、と草が潰れる音がする。小型モンスターの重さでは生み出せない程の大きな音。

「……………ドスファンゴだ。用意してくれ」

カチリ、と鉄刀に手を伸ばしながら、ナゼルが言った。シイナと、ファルの体に緊張が走る。スノウワンドを、抜き放ち雷ノ珠を装填した。

「……………行くぞ」

ナゼルが鉄刀《神楽》を、下手にかまえ走り出した。ファルと、シイナもそれに続く。

グルウウウ

その音に気付いたのか、ドスファンゴがナゼル達の方を向いた。ゆつくりと、ヒツメをかき始めた。

「来るぞ！シイナ、援護を頼む！ファルは、俺と一緒に突っ込め！グルウアアアアツ！！！」

ドスファンゴは、一気に加速して突進してきた。狙われているのは、ナゼルのようだ。その場で、回転をして回避する。何も無い場所めがけて、大猪は突っ込んだ。狙いを外した事に気付いた、ドスファンゴは体を無理矢理止める。振り返った時、すでにナゼルは、肉薄していた。

「リヤアアアアアアアツ！！！」

鉄刀を大上段から振り下ろす。さらに、追撃を掛けようとしたがすでに体勢を立て直した事に気付くと、目の前を薙ぎ払い、距離を広げた。

「ニヤアアアアアアアツ！！！」

ドスファンゴの背後から、ファルが飛び掛かった。骨ピツケルが、ドスファンゴの背中に命中する。ファルは、そのままドスファンゴの背中に飛び乗り、連撃を繰り返した。

再び、ヒツメをかき始める大猪。

「ファルツ！降りてっ！！！」

ドスファンゴの脇腹目掛けて、雷弾を放ちながらシイナが叫んだ。

「ニヤアツ!?!」

しかし、すでに動作に入ってしまったっているファルはかわせない。走り始めたドスファンゴに振り落とされてしまう。

「ファルツ!?!?!」

そこに気をとられてしまった、ナゼルの動きが止まる。その体目掛けて、ドスファンゴが走り込んだ。

「ぐっ!?!」

跳ねとばされる、ナゼル。

「ナゼルツ!?!」

倒れたナゼルの体目掛けて、ドスファンゴがヒツメをかき始めた。

「やばいつ!?!」

ピシッ!

シイナは、顔面めがけて雷を走らせる。その衝撃にドスファンゴの動きが止まった。

クルリ、と回転しシイナを睨む。

「ツ!?!」

その殺気に、一瞬シイナが怯んだ。大猪が、ヒツメをかき始める。ブルアアアアアアツ!?!

突進を始めたドスファンゴ。その体と、シイナの間にファルが割り込んだ。ピツケルを、横に構える。

キンツ!?!

「ニヤアアアアアアアアツ……………」

牙を弾き突進をまともに喰らう事だけは避けたが、勢いを殺しきれず吹っ飛ばされるファル。ドスファンゴの突進が止まる。

「ファルツ!?!大丈夫?!?!」

シイナが、声を上げる。

「この程度じゃ、まだまだニヤツ!?!それより、今はヤツニヤツ!?!」  
ブルウウウウ!?!

回復薬で回復したナゼルが、鼻先に鉄刀《神楽》を突き入れた。ダメージに一瞬怯む。



(おいおい、大丈夫かよ……………)

穴の中に、金属の円筒缶を埋め込んだ。この円筒缶は、シビレ罠というアイテムだ。内部にゲネポスの麻痺毒が、仕込まれていて、触れた瞬間標的を麻痺させる。捕獲するには、標的を罠にかけ、束縛しなければいけないのだ。

プオオオオ

ファルが、角笛を吹き鳴らした。その音に反応し、ドスファンゴが突っ込んでくる。

次の瞬間、シビレ罠にかかり大猪は自由を失っていた。

ナゼルは、ポーチから捕獲用麻酔玉を取り出し、ドスファンゴに投げつける。命中するたびに、白い煙が吹き上がる。

二つ目の、煙を吸い込んだドスファンゴはどさり、と倒れた。顔の前にある鼻から、鼻提灯を膨らませ始める。

「よしっ！」

ナゼルが、ガッツポーズをした。腰のポーチから、発煙筒を取りだし紐を引く。クエスト成功のしるしだ。

「こうやっていたのかニャ……………」

ファルが、発煙筒を見て驚いた声を上げた。

「いつも煙が上がっていたから、どうやっているのかと思っていたニャ」

「どうやってると、思ってたの？」

シイナが、ファルにたずねた。ファルが、笑ってポリポリと後頭部をかく。

「いちいち、焚き火でも起こしてるとかニャ」

「そんな、面倒くさい事したくないなあ……………」

ナゼルが、笑った。

「まあ、いい。さつさと帰ろ」

枯れ草が、ピシリと折れる音がした。ネコタク  
ネコタクシーが来たようだ。

正式名称

「お待たせニャア」

ファルが、ネコタクの上に飛び乗った。ナゼルト、シィナも腰掛け  
る。

「出発ニヤア」

ガラガラ、と車の音が沼地に響き渡っていた。

## 第七話：師匠登場！

「ああ〜お腹一杯」

シイナが、腹をなでた。ドスファンゴ狩りの報酬で、潤っているシイナはキッチンに来ているのだ。

「オステイさん、お勘定」

ヒラヒラ、と手を振ってキッチンアイルーのオステイを呼ぶ。

「えと、お食べになったのは、頑固パン四個、フラヒヤビール三杯、ワイルドベーコンと激辛ニンジンのピリカラサラダ、たてがみマグロの姿作り、エメラルドリアンのパフェ、幻獣チーズのフォンデュ………お会計は、2000Zですニヤ」

その言葉を、聞いていくたびにシイナの顔が青ざめていく。そして、最後に代金の合計を聞いた瞬間、懐から財布を取り出した。

「すっからかんだあ……」

ドスファンゴ狩猟の報酬金は、1000Z。契約金として、500Z。受け取ったお金の合計は、2000Zだ。ぎりぎり2000Zあったものの、もう所持金は無い。

「どうしよあ〜」

普通の生活をすれば、一週間は軽く暮らせる代金を、たった一日で使ってしまったのだから無理もない。

「お金でも、借りてこようかなあ〜」

顔を手で覆いトボトボ、と道を歩いていると  
ドンッ！

「おと、すいま　　って、村長、どうしたんですか？」

いつもは村の入り口で焚き火に当たっているはずの村長がそこにいた。

「おお、シイナ。探しとったんじゃぞ。ささ、早く来い」

村長が、シイナの手をつかみ歩き始めた。

「何処、行くんですか？」

背の低い村長に合わせて、身をかがめて歩きながらシイナはたずねた。

「ここじゃよ」

村長が指し示したのは、訓練場。

「ここで、待ち合わせているのじゃ」

ギィ……………

闘技場の、扉を押し開けると、教官と

「村長ツ！？」

「わしは、ここじゃ」

村長に酷似した、竜人族の老婆がいた。

「コイツは、わしの姉御。又シを教えてもらおうと、わしが呼んだんじゃ」

村長が、手で老婆を指し示しながら説明をする。

「コイツとは、何じゃ！……………コホン、え。シイナといったな？わしが武器の使い方教えてやろう。師匠とよびなさい」

師匠が、腕を組んで言った。背中には、魔杖を持っている。

「その魔杖は、何ですか？」

シイナが、聞いた。師匠が、魔杖をとりだした。スノウワンドの白に似た、銀色の魔杖。

「これは、銀火竜の素材から作った魔杖『リオグランデ』【S】『じやよ。炎ノ珠や、龍ノ珠を得意としている魔杖じゃ」

キラリ、と魔杖が光った。先端に固定されている老山竜の、紅玉が光を反射する。

「こんな事を話している場合では、ないわ。シイナ、早速修行を始めよう」

師匠は、シイナの横に並んだ。リオグランデ【S】を構える。

「魔杖は、使用者の精神力を消費する事で珠を攻撃力を飛躍的に高める事が出来る。これは知っているな？では、『詠唱』は知っているか？」

師匠が聞いた。シイナが首を振る。師匠がコッソ、と紅玉を指先でつつく。

「『詠唱』とは、この宝玉に力をため込むことで、狩猟笛の『旋律』に似た効果を得ることが出来る技じゃ。ただ、補助系の『詠唱』は少なく、基本的に攻撃系の『詠唱』が多い。今は、補助系の『詠唱』を使ってみよう。例えば  
ピツ、と村長が杖を目の前に構えた。上から下に、杖をふると、紅玉が赤く光った。横に印を結ぶと、青く光る。

「『紅』と、『蒼』を組み合わせると、防御力が僅かながら上がる。次は  
「

師匠が、グツ、と杖を突き出した。宝玉が黒く光る。そこから、赤、黒、青、と印をつなげる。

「『黒』『紅』『黒』『蒼』で、龍耐性が飛躍的に上がるのじゃ。

そして  
「  
黒、黒、青、赤、と宝玉が輝いた。ゆつくりと、宝玉から光が広がっていく。

「『黒』『黒』『蒼』『紅』で、攻撃力が異常なまでに上がる。しかし、代償として防御力が一気に下がってしまうのじゃ」

フツ、と宝玉の光が消えた。師匠が、リオグランデ【S】をしまい込むと、シイナも手で指し示した。

「さ、やってみい。スノウワンドで、使える『紋章』は『銀』『蒼』『空』じゃ。それで、使える補助系『詠唱』は、『銀』『空』『蒼』で成る『体力回復』じゃな」

シイナは頷くと、スノウワンドを構えた。宝玉が、銀、空、蒼と色を変えて、光り輝く。教官が、驚きの声を上げた。

「おお、体の奥から、力が湧き起こってくるぞ！ー！」



に突っ込むと、ベッド目掛けてダイブする。

「……………ZZ」

シイナは、気持ちよさそうに寝息を立て始めた。その一分後

ドンドンドン！！！！

扉が叩かれて、大きな音を立てた。シイナが、不機嫌そうに身を起こした。

「ん……………。誰ですか……………？」

訪ねてきたのは、村長だった。机の横の椅子に、腰掛けると、口を開く。

「昼間は、時間が無くて聞けなかったのじゃが……………狩りは、どうじゃった？何か思いだしたか？」

あれは、四日前の事

「又シに頼みがあるんじゃ

村長が、口を開いた。

「シイナと、狩りに出てやってくれんか？狩りの途中で、記憶を取り戻すこともあるっ」

ナゼルが、その言葉を聞き驚いたように、目を見開いた。視線が、村長とシイナの間を漂う。

「別にいいですけど……………。シイナは、それでいいのか？」

ナゼルが、シイナにたずねた。シイナは、勢い良く首を縦に振る。

「うん！！これから、何をすることもやっぱり記憶を取り戻さないとダメだからねえ〜」

V！とばかり、に指をV字にして突き出すシイナ。

「……………分かった。これから、よろしくな」

ナゼルが、手を差し出す。

「うん！」

シイナが、勢い良くその手を握りした。

あの日の事を、思い出しながらシイナが返事する。

「思い出すも何も……………。オババ様、思い出したら知らせに行つて  
ますよ」

その返答に、村長が苦笑した。

「確かに……………。この質問は、無駄だったようじゃな」  
シイナが、頷く。

「今度、何か思い出したら、知らせに行きますよ」

「ああ、頼むよ」

村長が、手を振りながらドアを開けて、村に出ていった。  
バタン、と音がして、ドアが閉まる。それを確認すると、シイナは  
眠りについた。

火山、真っ赤な溶岩が煮えたぎり、凶悪なモンスターが生息する地。  
ドロリ、と溶岩が蠢いた。ゆっくりと、黒い甲殻が、溶岩の上に現  
れる。

黒い竜は、緑のその目で、辺りを見回した。

## 第八話：新たな仲間と大怪鳥！

「大怪鳥、イヤンクック？」

ナゼルが、首をひねった。村長が頷く。

「そうじゃ。又シらは、ドスギアノスを狩ったじゃろう？」

言わずとも分かるだろう、とばかりに村長が言った。

「ドスギアノス狩ったからって、結構ギリギリだったし……。辛  
いだろあ」

ナゼルの装備は、バトルシリーズにクラスアップし、シイナは珍しい武器、魔杖の使い手だ。とはいえ、二人ともまだまだ未熟。大怪鳥の異名を持つモンスターを狩るのは辛いだろう。

「うむ、又シら二人では、イヤンクックを狩るのは厳しいだろう。集会所で仲間をつのつたらどうじゃ？ どうせ、この後も二人で狩り続けるのは辛いじゃ。これを機会に仲間を集めたらいいじゃな  
いか。期限は、寒冷期に入るまでじゃし、気長にやってくれ」

それだけを言うと、村長はナゼルに断る暇を与えず、外に出ていっ  
た。

「仲間かあ……………」

ここは、ロウン。リユート村の近くにある唯一の町である。活気にあふれている明るい街なのだが、昼間から、酒と煙草の匂いが漂う酒場の中に、集会所はある。ハンター達の飲んでいる酒は、狩り成功の祝い酒か、それとも悔し酒か。

「長く組める狩りの仲間募集中！！当方太刀使い。HR1。志望者は、ポツケ村C 11 ナゼル宅まで っと……………掲示板に張り

付けて……………」

ナゼルは、募集用紙の欄を埋めると、煙草の煙で黒ずんでいる掲示板に張り付けた。

「後は、待つだけだ。誰か来てくれますように……………」

ナゼルはパン、と両手を合わせた。

「あの……仲間を募集しているのはここですか？」

ロウンから、帰ってきて一時間。ナゼルの家（しっかりと、シイナ&ファルもいますのでお忘れなく）の扉を叩いたのは、十五ぐらいの少女。

ハンターシリーズを身にまとい、ライトボウガンであるシヨットボウガン・白を背負っている。黒髪を、キリンテールにしているおとなしそうな風貌の少女だ。

「ロウンの掲示板を見てきたんですけど……………。ここで合ってますよね？私は、サクラです」

ふたたび問われ、観察していたナゼルはハッ、と我に返った。

「あ、そうだよ！」

ナゼルがそう言うと、シイナは手を差し出した。

「私は、シイナ。これから、よろしくね！」

サクラも、しっかりとその手を握り返す。

「こちらこそよろしくっ！！」

その後、三十分もしないうちにもう一人ハンターが訪ねてきた。

アーノという、双剣使いの男だ。銀髪をレイスレイヤーにして、ギアノスシリーズを身に付けている。武器はデュアルトマホークだ。

「これから狩りたいと思っっているモンスターは、イャンクックだ」  
そうナゼルが、口にするるとサクラが驚き目を見開いた。アーノも、

すこしびっくりしたのか、ナゼルの方を注視している。

「出るのは、出来るだけ早いほうがいい。みんな、準備をしておいでくれ」

シイナ達は、頷くとそれぞれ準備をするために村に出ていった。

緑の木々が生い茂り、視界は利かない。どこからモンスターに襲われるか分からない森林。見通しは利くものの柔らかい砂のせいで踏ん張りが効かず、急に動く事が出来ない砂浜。この二つが合わさったフィールドに与えられた名は、密林。

「イヤンクツクはどこにいるの？」

シイナが、サクラに聞いた。サクラの装備しているハンターシリーズには、第六感を高め、大型モンスターの居場所を教えてくれる能力がある。

「……………五番区域ですね」

天井には大きな穴が開き、周囲を岩壁で覆われたエリア5。大型モンスターが巣として使用することが多い場所だ。

「よし！ひとつ走りすればすぐに着くな！」

そういうと、四人（と一匹）は走り出した。

大きな耳は、どんなに小さな音もとらえ視覚以上に、イヤンクツクが頼っている部位である。その耳をたたみ、大怪鳥は眠りの中にいた。

「……………いたニヤ」

目の良いアイルー族であるファルが、いち早くその存在を見付け、皆に注意を促した。

ナゼルは、鉄刀《神楽》を抜きはなった。アーノも、デュアルトマホークを抜き放ち構える。サクラも、ショットボウガン・白にLV





シイナが、その後ろ姿に衝撃波を連射した。しかしイャンクックは射程から外れ、衝撃波はその体に届く前に力を失う。

「私なら……………大丈夫です……………」

サクラは、力を振り絞る様に立ち上がる。しかし、すぐに膝が折れくずおれた。とても、狩りを続行できる様子ではない。

「このままじゃ……………」

ナゼルが、空に視線を走らせた時  
パアアツ

シイナが、杖を胸に抱いた。

銀色の光が、辺りを照らし出す。光が銀色から、空色へ

「なにをしてるんだ？シイナ？」

アーノが、怪訝そうに問う。

それには答えず、シイナは杖で目の前に線を描いた。空色の線が宙に走る。宝玉の色が、湖の様な蒼色に変わった。

「力が湧いてくる……………何ニヤ？」

ファルが、シイナに聞いた。

「魔杖の特殊効果、『詠唱』。これは、仲間の傷を癒す“体力回復

”。これで、シイナも立てるよ」

そう聞くと、サクラは足に力を込めた。少しよろめくが、すぐにしっかりと立ち上がる。

「……………立てた？」

先程まで、立つことすら出来なかったのが嘘のようにしっかりと立っている。サクラは、足を屈伸させ自らの状態を確かめる。

「これなら、クエスト終了ぐらいまでは持ちます。イャンクックを狩って帰りましょう！」

サクラの言葉に三人は、頷いた。





突き、斬り上げ、斬りつける。アーノが、二つの刃で乱舞を繰り出す。ファルは、ピツケルを振り下ろした。一瞬体を止め、体勢を直す。再び斬り付けた。大怪鳥は、必死に立ち上がるうとする。

「氷の刃」

シイナが、そう呟くと魔杖を振り下ろした。宝玉から、冷気が噴き出すと空中で形作られ、刃がイヤンクツクの翼を切り裂いた。再び、イヤンクツクが、地に倒れる。

クアアアツツ！！

悔しそうに、イヤンクツクが咆哮した。バタバタ、と裂けた翼をはためかせる。

ナゼルは、即座にイヤンクツクの顔に肉薄した。

「ハアアアアアアアアツツ！！！！」

ナゼルは刃に気力を込め、右上から円を描くように斬り付けた。再び気力を乗せ一の太刀と全く同じ軌跡を、逆からなぞる様に斬り付ける。右に、左に、切っ先で払いを入れると、大上段から全身の気力を乗せて斬り付けた。

ナゼルの鉄刀《神楽》が、イヤンクツクの耳を断ち切ったとき、大怪鳥は息絶えた。

第九話：引っ越し＋緊急依頼（前書き）

マジで更新が遅れました。すいません。  
あ、あとタイトルをちょっと変えました。

## 第九話：引っ越し＋緊急依頼

「これで最後っ、と……………」

アーノが木箱を、小屋に運び込んだ。角を鉄鉱石で補強した、木箱を壁際に置く。カチャ、とドアが開きナゼルが小屋に入ってきた。

「終わったか？」

アーノが頷くと、ナゼルは木箱を見た。

「結構荷物多いな……………。 武具と素材？」

再びアーノが頷いた。一つ一つ、箱を指さしながら説明を始める。

「この箱が、素材。こっちが武具を入れた箱だ」

ほお、とナゼルが感嘆し声を上げた。

「ハンター歴が長いんだな……………」

ナゼルが言うと、アーノは苦笑し、首を横に振った。

「俺の故郷では、鉱石が豊富に取れたからな。ハンターになったとき、餞別としていろいろな鉱石を貰ったんだ。素材は、鉱石がほとんどだし、武具も鉱石で作った物ばかりだよ」

どれどれ、とナゼルが箱を開けた。中には、マカライト鉱石や鉄鉱石、円盤石に大地の結晶、氷結晶、砥石に石ころ、と鉱石がぎっしり詰まっている。端には僅かながら、希少なドラグライト鉱石やライクリスタル、紅蓮石が入れられていた。

「うわっ、すげえな。 鉱石には困らなさそうだなあ」

ナゼルの声に、アーノが頷いた。と、キイと扉が開いた。

「あ！ここに居たあゝ。 サクラあ、ここに居たよあゝ」

シイナが、ナゼル達を呼びに来たようだ。 サクラも、後ろから駆けてくる。

「こっちの引っ越しも、終わったよ」

サクラも、この村に引っ越してきたのだ。

「そか、んじゃ村長に手続きしてもらわないとな。 ギルドに移住届け出して貰わないと」

コクツ、とシイナが頷いた。アーノが溜息をつく。

「登録は簡単なのに、移住届けは面倒臭いんだよなあ」  
サクラとナゼルが頷いた。

「時間がかかるだろうからさっさと行こうぜ」

ナゼルは相変わらず建て付けの悪い扉を開けて、村に歩き出した。

「この書類で終わりです」

村役場に、四人が来てから早二時間（ファルは、キッチンにて修行中です）。ギルドカードの更新、村のハンター数の増減報告、ギルドの狩り場使用申請、キッチンの使用申請、e t c……………。大量の書類を書き続けていた、二人の肩は相当に疲労しているようだった。  
「これで、終わりかあっ」

アーノが、サインをするとペンを置いた。肩をポンポンと叩く。サクラも疲れた様だ。

「肩、痛いです……………」

村長は笑うと、ペンとインク壺を片付けた。

「おい、終わったぞ」

二時間の間退屈をしていたシイナは、すっかり爆睡している。ヒプノックの睡眠ブレスでも喰らったように、ピクリとも動かない。

「おい、起きろ！」

ペシツ、とシイナの額を指で弾いた。シイナが、弾かれた様に起きあがった。きよるきよる、と辺りを見回す。

「ん……………。紅蓮鯛の姿作りは？アプトノスのステーキ厳選キノコソース掛けは？炎熟マンゴーと熱帯イチゴの砂漠パフェは？大王子カ、女王エビ、ピンクキャビ　　むぐう」

そこまで、言ったところでナゼルがシイナを制した。素早く口の中に、氷結晶イチゴを放り込む。

「主食がないぞ。それより、もう二人の登録は終わったぞ。さっさ

と帰ろう」

シイナが、もぐもぐと氷結晶イチゴを食べながら辺りを見回す。

「すっかり暗くなってるじゃん。どうりでお腹が空く訳だね」

そう呟くと、ポーチから携帯食料を取りだし食べた。ん、と顔をしかめてポーチからホットドリンクを取りだし飲む。

「……………辛っ」

トウガラシをにが虫を消毒し、エキスを取りだした物なのだから、それは、当たり前だ。

「……………」

シイナの無防備な後頭部めがけて、ナゼルは棒状の骨を一閃させた。

「……………！？何するのぉ!?!」

ホットドリンクの瓶を落としたシイナは、抗議の声をあげる。

「ほら、さっさと帰るぞ」

ナゼルは、抗議に取り合わず、棒状の骨をポーチにしまい込んだ。

「うう~~~~」

シイナが、うめき声を上げた。残ったホットドリンクをコクリと飲み干すと、立ち上がった。ナゼルが、扉に向かう。しかし、ナゼルがたどり着く前に扉はカチャリ、と開いた。

「……………ご主人達、いるかニヤ?」

ファルだ。背中に骨ピッケルを背負い、腰にはタルを付けている。さっきまで、訓練をしていたようで、疲れた顔をしている。

「おう、ファル。終わったのか?」

ナゼルが声をかけると、ファルはコクリ、と頷いた。何やら神妙な面もちで口を開く。

「村長から伝言で、緊急依頼だそうだニヤ。急いで行くニヤ」

緊急依頼とは、人命に関わる依頼の総称だ。一刻を争う、重要なクエストのため緊急依頼と呼ぶ。通常の依頼とは、訳が違うのだ。

「……………分かった。村長は、何処に居る?」

「……………来たか」

息を切らして走り込んだ、ナゼル達を、村長が迎えた。

「内容は？」

アーノが、聞いた。村長が、答える。

「内容は、『モンスターの排除』。古龍観測所の気球が砂漠に墜落してしまったそうじゃ。しかも運悪く、ドスガレオスまで発生している。観測データを持った状態で、ドスガレオスを避けるのは、不可能じゃろう？そのため、依頼が発生したという訳じゃ。今すぐ行けるか？」

その村長の言葉に、全員が頷いた。

「道具を少し準備すれば、すぐに出られる。三十分以内に出発するよ」

そして、ナゼル達は準備のため、村に散っていった。

第九話・引越し+緊急依頼(後書き)

次回では、キャラ紹介なる物をやってみようかと思っています。

## 第十話：黒い砂塵（前書き）

キャラ紹介というものを分不相応にもやらせていただこうと思います。今回はナゼルです。

## 第十話：黒い砂塵

セクメーア砂漠。そこは、大きな岩山と広大な砂丘から成る狩り場だ。足場が悪い砂丘に、見晴らしが悪い岩山から出来ているため、比較的上級者向けの狩り場である。

「観測所の人逃げ込んでるのは……………、八番エリアだな」  
ナゼルが地図を広げて、確認した。サクラが頷く。

「狭いために、モンスターは入れません。そこは運が良かったと言えませんが……………」

その言葉を、アーノが引き継いだ。

「八番から、ベースキャンプまで戻るには、広大な砂漠エリアの両方を通らなければ行けないからな。ドスガレオスを、討伐するしかない」

さらに、シイナが口を開いた。

「でも、ドスガレオスを討伐するまであの人達が耐えられるかどうか……………。あのエリアは、他のエリアに比べれば熱くないけれども、少しずつ体力が削られていってしまう」

その意見に続く様に、ファルも口を開く。

「お腹減ったニヤ」

「……………」

四人分の三点リーダーアタックを喰らった、ファルは肩をすくめると腰のタルから、こんがり肉を取りだしかぶりつき始めた。

「そうだな……………。俺達が、何処かのエリアで食い止めておくしかない。二番と五番以外でドスガレオスが出るのは、七番エリアか」  
サクラが、ナゼルの言葉に頷いた。

「観測隊の人には、九番から、五、一、二と移動して貰うしかないですね。ファルさん護衛をよろしくお願いします」

その言葉にファルが頷いた。シイナは背中に背負った魔杖を取りだ





を投げつける。

「くうっ！」

そのプレスが向かった先はシイナ。ギリギリで、砂プレスの直撃を避けるが、炸裂した勢いで吹き飛ばされた。ゴロゴロと、砂上を転がる。

カィィィィィィィィィィィィッ！！！！

あまりの大音量のため、砂漠の砂が僅かに動いた。特に優れた聴力を持っているわけではない人間でも、これ程の影響を受けてしまうのだ。聴覚の発達している砂竜は、苦しみ、もがきながら、砂中から飛び出す。

「ちいっ！」

間合いが開いていたナゼル達が、たどり着く前にドスガレオスは、体勢を立て直していた。明らかな殺気と、怒気を込めて狩人達を睥睨する。しかし、ここで距離を開けたらシイナに

ガンナ

ーであるため、剣士よりも柔らかい鎧をまとい、ダメージを受けているシイナに矛先が向かう可能性がある。攻撃を叩き込む以外の選択肢はない。

「あああああああああああああああつっつっ！！！！」

ナゼルは、走り寄った勢いと腕の力を乗せて、鉄刀《神楽》を突き出した。黒い鱗の間に、切っ先を突き入れる。

しかし砂竜は、そんな攻撃を物ともしなかった。ぐっ、と力を溜め込むかのように、左足に体重をかける。

「！！」

目で反応することは可能だが、回避するまでの時間はない。砂竜は左足に溜め込んだ力を一瞬で解き放ち、体をナゼルの体にぶつける。

「かはッ！？」

あまりの衝撃に目がかすんだ。ナゼルの体は、軽々と吹き飛ばされ砂の上を転がる。一步遅れて、間合いに飛び込んだアーノがドスガレオスの体突きを叩き込んだのが見えた。ナゼルが回復するまで



## 第十話：黒い砂塵（後書き）

【キャラクター紹介】 ナゼル

【武器】 鉄刀《神楽》

【防具】 バトルシリーズ

太刀使い。マグニ村出身。父が高名なハンターのため、「後を継ぐぞ！」とハンターになった。ファミ通文庫さんから出ているモンハンノベライズ、疾風の翼の主人公、マデリアアの兄と同じ名前なのは何か深い理由がある、かも？

## 第十一話：砂塵、暴炎（前書き）

今回のキャラ紹介は、シィナです。

あと、ナゼルのキャラ紹介のところでも『出身地がリユート村』となっていました。まことにすいませんでしたm（）（）m。

## 第十一話：砂塵、暴炎

「ふう、暑いニヤ……………」

ファルは額の汗をぬぐった。ここは広大な砂漠エリアの一つ、二番だ。見晴らしはとても良く、モンスターから不意打ちを受けることはない。それと引き替えに、モンスターにすぐ見つかってしまう。

「はぁ……………はぁ……………、ファルさん、ありがとございます」

肩で息をしているのは、観測所に勤めている青年　　ルイだ。

黒い髪と瞳を持つ、どちらかといえばおとなしそうな青年だった。

「少し、休憩するかニヤ」

ファルがそう言うと、ルイは顔を輝かせてコクリ、と頷いた。

一人と一匹は、岩壁付近の岩陰に腰をおろした。ルイは、観測資料などの入った袋から水筒を取りだし飲み干す。

「……………そう言えば、なんで気球が墜落したんだニヤ？あれが墜落した所なんて見たことないニヤ」

思い出した、と言う風にポツリ、とファルが疑問を口にする。その質問を聞いた瞬間、ルイの表情が、引き締まった。

「なぜだかは、分からないんですが……………。突然、突風が吹きつけて来ましてね。あれは急激な温度変化による物だと思つのですが……………」

「一体、何かニヤア？」

ファルは、首を傾げた。ルイは溜息をつき、水筒のふたを閉めた。

「そろそろ行きましようか。ナゼルさん達もたいへんでしょうし」

ルイは水筒を袋にしまい込むと、よっこらしよ、とかけ声をかけて立ち上がった。ファルも外していたタルを、背負い立ち上がる。

「ベースキャンプまで、もうすぐニヤから、頑張るニヤ」

ファルの言葉にルイがこくり、と頷く。見回した限り、ドスガレオスどころか、ゲネポスの『げ』の字も見あたらない。このまま、ベースキャンプへとたどり付ける　　ハズだった。

ギヤウアアアアアアアアアアアアアツ!!!

ちょうど、ファルの目の前から五十歩（アイルー視点）ほどの砂漠が『割れた』。

「！ドスガレオス……………！？」

押さえきれない悲鳴が、ファルの口から漏れた。その悲鳴を聞きつけ、ドスガレオスがゆっくりと振り向く。

「くっ……………ルイ！これを投げるニヤ！」

ファルはタルから、閃光玉を取り出すと、ルイに放った。ルイが受け止めたのを見ると、ファルは一般人である、ルイから遠ざけるため、走り出す。

「それで、助けを呼ぶニヤ！」

ギヤウアアアアアアアアアアアアアツ!!!!!!

砂竜は咆哮をあげ、突進を開始した。ファルは、四本の足を全力で動かし、その延長線上から逃れる。ファルの無事を、確認すると、ルイは点火用の紐を引き抜いた。思いつきり腕を振りかぶり、閃光玉を投じる。

「ええ~~~~いッ！」

ボン、と何かが破裂するような音が鳴った瞬間、砂漠が白色に塗り潰された。

パアアアアアアアツ……………

岩山の向こうが、激しい光に照らされた。一瞬の後、それは輝きを失い、暗くなっていく。

「閃光玉の光！あの位置は……………一番ね」

シイナが声をあげた。ナゼル達は頷き、それぞれの得物を背負い立ち上がる。

「くそっ……………！早く行こう」

ここからなら、岩山の洞窟を突き抜けるのが近い。ナゼル達は、洞窟の中に走り込んだ。ついさっきまでの熱気が嘘のように、冷気が

肌を刺してくる。

「うう……………」

アーノがうめき声を漏らした。寒気は徐々に、だが確実に四人の体から体力を奪い取っていく。

「もうすぐだ」

ナゼル達は、蒼い岩壁の中を走り抜ける。

少しずつ、光が強さを増していく。

「出た！」

つい先程まで肌を刺していた、冷気が一瞬で背後に取り残され、むつとする熱気が押し寄せてきた。そして、その熱気と共に、轟音が押し寄せて来る。

ガキキキキキキキキキキキ……………」

砂塵を巻き上げて、吹き飛ばされるファル。どんぐりメイルのおかげで、怪我は免れたようだが、吹き飛ばされゴロゴロと転がる。

「ファル、さん……………！？」

ドスガレオスが咆哮を上げる。黒ずんだ巨体から発せられた音に、ビリビリと空気が震えた。

ギャウアアアアアアアアアアアツ！！！！

「くそっ！」

砂竜は、足を砂上に踏ん張った。砂プレスだ。四人は狙点から散開する。ナゼルの背後で、砂が炸裂した。

くるり、と前転をしてドスガレオスの体の下に潜り込む。背中のお太刀に手を伸ばし、柔らかい腹を斬り付けた。突き、斬り上げと、基本の型を叩き込むと、太い足を薙ぎ払い後方へ跳ぶ。

ガキインツ

これまでの攻防で切れ味が落ちていたのだろう、鉄刀《神楽》の刃が弾かれた。衝撃が返され、隙が生まれる。

「馬鹿やってんなよなっ！」

ザクツ、と斧形の刃が胴に叩き込まれた。斬り上げ、斬り下ろし、次々と刃を振るう。銀色の剣閃が描かれるたびに、黒い鱗が弾け跳

んだ。ちら、とファルの方を見ると、サクラが回復薬を取りだしていた。

「《巨人の指》」

蒼、銀、空、銀。光りが辺りを照らし出す。その光は、剣士達の力を強めていく。

「おおおおおつ!!!」

かちり、と斧形の刃を頭上ですり合わせた。体力を引き替えに、飛躍的に攻撃力を上昇させる双剣使いの奥義、鬼人化だ。

「はあああああああつ!!!」

両の刃を次々と振るう。体から溢れ出した闘気が、紅く色を帯び、デュアルトマホークを包み込んでいく。先程の斬撃とは比べ物にならない威力の攻撃が、次々と繰り出された。斬り上げ、斬り下ろし、舞うように斬り付ける。

ギヤウアアアアアアアアアアアツ!!!

「うるさあああいつ!!!」

ナゼルが、研ぎ終わった鉄刀を突き入れた。斬り上げ、斬り付け、右上から円を描くように気刃斬りを放つ。練り上げられた闘気が刃の鋭さを増し、砂竜と黒ずんだ鱗を易々と斬り裂いた。

ギイヤウアアアアアアアアアアアツ!!!

自らの体を傷つけられ、ドスガレオスは怒り狂った。先程よりも盛んに白い息を吐き出し、目に殺気をぎらつかせている。

「怒ったか!」

ナゼルは小さく叫ぶと、目の前を薙ぎ払いつつ後方に跳ぶ。前転で距離を稼ぎ、体勢を立て直す。

ギイヤアアアアアアアアアアアツ!!!

斬り続けるアーノをものともせず、砂の中へと潜り込んでいく。ものすごい速度で周囲を泳ぎ回る。

「……………」

ナゼル達は、自らの得物をしまいこんだ。三人の所へ、サクラがファルとルイを連れて走ってきた。砂竜は六人の周りを、円を描くよ

うに泳ぎ回る。

ギウアアアアアアアアアアツ!!!

パツ、とドスガレオスの動きが止まった。次の瞬間、上半身だけを砂上に突き出すと、体を力ませる。砂ブレスだ。

「そつ何度も通用するかよ　　ッ!?」

十分に射線から退避していたはずだ。なのに　　吹き飛ばされた。背中に直撃し、激痛が走る。あまりの痛みに、悲鳴すらも出ない。ごろごろと、地面を転がりながら見ると、アーノにも命中してしまったようだ。シイナの時とは違い、直撃を受けてしまったため、指先一つ動かすことが出来ない。

「え……………?三発……………」

シイナが、声を漏らす。サクラも驚き、動きが止まってしまっている。

ギヤウアアアアアアアアアアアツツ!!!

砂竜の咆哮が砂を揺るがした。震える砂の中から飛び出す砂竜。大きく口を開き、二人目掛けて飛び掛かる。

「くうっ!!」

命中までの一瞬について、サクラがルイを、シイナがファルを突き飛ばす。

ガアアアアアアアアアアアツツ!!!

吹き飛ばされ、つきとばされ、薙ぎ倒される。二人の体からは、完全に力が抜け、地面に倒れ伏してしまう。

「マズ……………いな……………」

まともに動けるのは、一般人であるルイだけ。狩人でもなんでも無いルイは、ドスガレオスにとってただの餌にすぎないだろう。

ドスガレオスが近づいてきたのだろう、周囲がふっ、と暗くなる。

ガアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアツツ!!!

!!!!!!!

ギイヤアウアアアアアアアアアアアアアアアアツツ!?

咆哮が二つ、響いた。刹那、爆音が砂漠の空気を震わせる。



## 第十一話：砂塵、暴炎（後書き）

【キャラクター紹介】 シイナ

【武器】 スノウワンド

【防具】 チェーンシリーズ

魔杖使い。何よりも食を重んずる性格。記憶喪失以前に『狩猟料理大全（全十巻）』を書いた事がある（この本はストーリーには全く絡んできませんw）。ちなみに、年齢は十五歳。

【精密属性値による自然現象への干渉】（前書き）

やっとこさ、プロットを立て終わりましたので、またまた分不相応にも伏線（の様な物）を張ってみようと思います。  
ちなみに今回のキャラ紹介はアーノです。

## 【精密属性値による自然現象への干渉】

以降は、《精密属性値による自然現象への干渉》より、抜粋、編集した物である。

………（中略）基本属性として、火、氷、水、雷、龍が存在している。この基本属性の内、火、氷、水、雷は、人工的に作成することに成功しているが、龍属性のみ作成が成功していない。また、他の四属性の原理は解明されているが、龍属性の原理は解明されていない。この二つの点から、龍属性は他の四属性とは、何らかの違いを持つ属性で有ると考えられる。

………（中略）龍属性は人工的に発生させることが出来ないが、龍属性武器が存在している。なぜ、発生不可能な属性が武器に備わっているかという点、武器に使われた素材に属性が備わっているためである。龍属性が付加された武器の素材として、多用されるのは古龍の素材であるため、古龍には龍属性を発生させる何らかの器官がある、という仮説が立てられる。つまり、多属性が人工的に生み出される物である反面、龍属性はモンスターが自発的に生成する属性である、という事だ。その点から推測し、実験してみた結果、非常に熟練した魔杖使いが龍属性をモンスターに放射すると、洗脳し、操ることが出来ると判明した。ただ、操縦可能なモンスターは小型に限られ、兵器としての実用性は低いと思われる。しかし、幻獣系防具を装備する事で属性値を上昇させることができ、そうすれば《属性攻撃強化》を使用していない場合に比べ、より強力なモンスターも洗脳することが出来るので、より高い龍属性値を手に入れることに成功すれば、大型モンスターを兵器化することが可能だと推測できる。

………（中略）加えられた各属性の蓄積値が100の値を超えた場合のみ、崩壊するウルフェウス鉱石を使用することで、古龍の攻撃

に龍属性が備わっている、という仮説の検証に成功した。《龍殺しの実》を使用して、ウルフェウス鉱石に龍属性値90の攻撃を加えた。この場合、龍属性10の攻撃が加えられた場合、ウルフェウス鉱石は崩壊する。

……………（中略）老山龍の直接攻撃に龍属性が備わっている事は、上記の通りである。この事から、老山龍の体内には、龍属性を発生させる器官が備わっていると推測が可能だ。ハンターが討伐した老山龍の死体を提供してもらった事に成功、ウルフェウス鉱石を使用し、老山龍の体内を探索した結果、龍属性値が最も強い箇所を発見することに成功した。この箇所は、モンスター素材である《老山龍の紅玉》に非常に類似した形状をしていた。この部位を、便宜上《老山龍の龍珠》と呼称したいと思う。この《老山龍の龍珠》を武器に加工する事で、最も高い龍属性値を得ることが出来ると思われる。この龍属性値ならば古龍レベルのモンスターの脳波に干渉が可能であると考えられる。また、老山龍の素材の中で、最高硬度といわれている《老山龍の天鱗》すらも超える硬度を持っているため、最高の攻撃力を得ることが可能である。

……………（中略）《老山龍の龍珠》を武器に使用した結果、いかな素材を使用して加工しても《老山龍の龍珠》の龍属性値によって崩壊してしまった。生前、《龍珠》を保有していた老山龍の素材を使用しても、崩壊してしまう。また、《老山龍の龍珠》の龍属性値は、既存の防具では防ぐことが不可能であり、使用する際に大怪我を負ってしまう危険性がある。この実験の際、職人二人が指を吹き飛ばされ、一人が死亡してしまった。この二つの点から、《老山龍の龍珠》を武器に使用する事は不可能だと考えられる。このため、《老山龍の龍珠》を使用して、モンスターを洗脳することは不可能と思われる。

【精密属性値による自然現象への干渉】（後書き）

【キャラクター紹介】アーノ

【武器】デュアルトマホーク ギアノスクロウズ

【防具】ギアノスシリーズ

双剣使い。鉱石が豊富な土地に住んでいた。ナゼル達のパーティで唯一、二つの武器を所有している。

第十二話：「RYUGEKIHO

！」（前書き）

紅消牙さんの小説とコラボさせていただいております。

いいですね、コラボ！どんどんコラボの輪を広げていきたいです。

ちなみに今回の更新が遅れた理由は、作者が持病の発作を起こしたからです。

え？病名？……「厨二病」…。

ちなみに作者と同じ病気を持った人が、今回の話で出てきます。

## 第十二話：「RYUGEKIHO」!

「そうか、砂漠に逃げていたか……………」

村長が深々と溜息をついた。ここは、リユート村。

「何でも、ドンドルマでテオ・テスカトルを撃退したらしいんじゃない。セクメーア方面に逃げたから、砂漠のクエストはG級ハンターにのみ受けさせるようにといわれていたのじゃが……………」

再び村長が溜息をつく。

「ここは奥地じゃから、その情報が届いた頃には又シらは出発しておったよ」

「そうでしたか……………」

サクラが声を漏らす。

「どつりで傷ついていたわけです。目先の障害であるドスガレオスを排除し、大した脅威でも無い私たちは放って置かれたんですね」

サクラの立てた仮説にうむ、と村長は頷いた。

「それについてはギルドに報告せねばならんのが……………僕は今、体が空いておらんでのう。ナゼル、代わりに行ってはもらえんか?」

こく、とナゼルは頷く。

「みんな、行って来るか。少しばっか観光するのも悪くないし」

三人と一匹もこくり、と頷いた。

ロウンの街。

石畳の道を、四人と一匹は進む(ルイは、リユート村に古龍観測所支部を立ち上げることに決めたそうだ)。

「おし、ギルドに報告も終わったし……………遊ぶか!」

ナゼルが声を張り上げた。おー!とシィナが手を空に突き出し、雄叫びをあげる。

「そうだな……ひとまず酒でも飲もうぜ。集会所行こうぜ。ちよ  
うど目の前だし」

アーノの提案に、サクラも賛成の意を示すように、頷く。  
「がちゃ、と木の扉に手をかけ、開く。

「はあい、いらっしやい！何の御用ですか？」  
黄色い制服をまとった受付嬢が声をかけた。

「えと……こういう依頼を見つけたんだけどね」

ガンランスを背負った狩人が依頼書をカウンターの上に放る。その  
依頼書を見て、受付嬢が声を上げた。

「ああ、《ガノトトス》討伐の依頼ですね。場所はセクメーア砂漠  
です」

こくり、と狩人は頷いた。イーオスヘルムの間から垂れる髪の毛を  
掻き上げる。長い黒髪、声からすると女のようだ。

「パーティで行くのですか？」

再びこくり、と頷く。ペンを取り出すと、紙に名前を書き込んでい  
く。

「はあい、了解です！リンさん、出発は今日の二時ですのでよろし  
くお願いしますです」

「リン………？」

ナゼルが声を漏らした。その声に、狩人が振り返る。帽子形のイー  
オスヘルムのため、露わになっている瞳が驚いたようにきゅっ、と  
細くなった。

「ナゼル!？」

「リン!リンか!？」

確信に満ちた声。再会の喜びに弾んだ言葉。

「ナゼルもここら辺でハンターやってたんだねえ………。偶然だね」  
狩人はうんうん、と顎をなでながら頷く。首を傾げながら、シイナ  
が問いを口にした。

「あの……ナゼル、この方は？」

ああ、とナゼルが振り返る。右手で、イーオスシリーズの狩人を指

し示しながら、言葉を口にする。

「こいつはリン。俺の幼なじみのガンランス使いだ」

「キミ、ナゼルの仲間の人？ナゼルがお世話になってそうですね」  
ペこり、とリンがお辞儀をした。あわてて、シイナも頭を下げる。

「おい……………、リン？どうしたんだ？」

後ろから突然声がかかった。振り向くと、そこには巨大昆虫カンタロス素材から作ったタロスシリーズを身にまとった狩人が居た。背中にはアイアンストライク改を背負っている茶髪のハンマー使い。

「……………友達？」

その後ろにはレイアシリーズとパワーハンターボウ2を装備している女性。頭のみ、集中力を高めてくれる《増弾のピアス》を付け紺色の髪が肩に掛かっている。

「ああ、私の幼なじみ。ナゼルっていうんです」

ふうん、と弓使いの狩人が溜息をついた。リンが双剣使いのハンターを指し示しながら言う。

「ナゼル、こっちはアル。双剣使いのハンターなんだ」

ペこり、とタロスヘルムを小脇に抱えて挨拶をした。リンは手を弓使いの狩人に差し替えながら言う。

「こちらはクーラさん。私の師匠なの」

へえ、とナゼルが声を漏らした。

「師匠に教えて貰ってるのか……………」

さあ、とシイナ達を見回すと、クーラは口を開いた。

「……………立ち話は。席に座って」

「くはあっ！」

リンはビールを一気に飲み干すと、口元を拭った。

「えと、端からシイナ、サクラ、アーノ、で合ってるよね？」

こくり、と頷く三人。その様子を見ていたクーラは、口を開いた。  
「……………リン。出発は？」

その言葉を聞き、あっ、とリンは口を開いた。

「えと、二時で……………ってもう時間無いです！急いで、アル、師匠  
！」

がたがた、と荷物を掴み、立ち上がる。アル「も、《ドキドキノコ  
のきまぐれパスタ》を一気に口に流し込んだ。クーラは、《イヤン  
クックの手羽先》を口に放り込むと、立ち上がった。

「んじゃね！ナゼル、後で遊びに行くから！リユート村だよね？う  
ん、解った！」

リンはそれだけを早口でまくし立てると、ダッシュで遠ざかってい  
った。アル「、クーラの二人もその後が続く。

その後ろ姿を見送りながら、ナゼルはポツリと呟いた。

「金払ってねえ……………」

「師匠、アル、今回の相手はガノトトスです」

リンは砂漠のベースキャンプで、二人にそう切り出した。

「特別な行動はありませんから、いつも通りの立ち回りで大丈夫……

……………ですよね？」

問いかけるようなリンの言葉に、こくり、とクーラが頷く。

「んじゃ行こう」

アルはそう言うと、支給品が収められたアイテムボックスから、携  
帯食料、応急薬、ホットドリンクを取りだし、アイテムポーチに詰  
め込む。

かちり、しっかりとふたを固定し、貴重なアイテムを落としてしまっ  
た。事が無いようにすると、ベースキャンプの奥にある井戸に歩み寄っ  
た。

しっかりと固定された綱を掴むと、その上で足を交差させ、するす

ると滑り降りる。この井戸は、《ガノトトス》がよく出現する洞窟内に直結しているのだ。

「ほっ！」

ある程度滑り降りると、手を離し、飛び降りた。武器、防具、体重の全てを足で受け止め支える。と、瞬間

ギヤアアアアアアアアアツ！！

咆哮が響き渡った。ばしゃ、と奥の池から、なにか巨体が飛び出す音。巨大な生物が、岩床に着地する。

ガノトトス

水竜。全飛竜の中で、最も大きな体を持つ飛竜だ。二つ名の通り、水中からの奇襲攻撃や、高圧の水ブレスを得意とする。限界まで圧力をかけられたそのブレスは、下手な防具なら簡単に両断するだけの威力があった。更にその巨体での体当たりは、広範囲、高威力、連続で喰らえば鍛えたハンターでも昏倒してしまう。

がちり、とリンは《討伐隊正式銃槍》を組み立てた。

弾倉に弾を装填すると、再びたたみガノトトスとの距離を詰める。

ギヤアアアアアアアアアツ！！

水竜は、体の中から何かを押し出そうとするように、頭を振り上げた。大きく開いた口から水が漏れる。水ブレスだ。

「……………」

ヒュウン

大きく体を振り上げたため、がらあきになった柔らかな腹。

その腹に次々と矢が突き刺さる。

ギヤウアアアアアアアアアツ！！

悲鳴をあげ、どうっ、と倒れる水竜。練り上げた水ブレスが暴発し、岩壁を削る。

「はい、よつと！」

アルは腰だめに構えたアイアンストライク改を、大きく振り上げた。一度目の前を横に薙ぎ払いつつ、ハンマーに加速を付け、そこから一気に叩き付ける。

ドゴオンッ！

衝撃と共に、洞窟の壁が揺れた。

頭部を強打されたにも関わらず、水竜は平然と立ち上がる。

「りやあああああああああつ！」

ガードが出来ず、攻撃の際も大きいハンマー使いが、モンスターの近くに留まることは自殺行為と言って良い。

離れていくアルと入れ替わりに、リンが距離を詰めた。穂先を大きく突き上げると、三度穂先を突き入れる。

「……………」

ぐうつ、とパワーハンターボウ2に獵矢をつがえるクーラ。力をため、パワーハンターボウがギシギシと、音を立てる。

ヒュウウンッ

ギリギリまで溜め込まれた力が一気に解放される。しっかりと狙い澄まされた矢があやまたずに、ガノトトスのヒレを貫く。

ギヤウアアアアアアアツ！

「黙れえっ！」

低くかまえたハンマーを思い切り振り回す。鉄槌が爆発的に加速していく。強力無比な威力を遠心力に転化する。

ガガアアンッ

大剣の一撃に匹敵する攻撃が連続してふるわれる。強固な甲殻を持つ水竜といえど、それは耐えられる物ではない。

グウアアアツ

ギリ、眼に殺気をたたえアルを睨め付ける。ガノトトスの体勢が、急に低くなった。まるで力を溜め込む様に。

「やばいッ！」

ハンマーを連続して振るつたため、アルの体は即座に動ける状態に無い。このままではモロに攻撃を受けてしまう。

「えいッ！」

勢い良く地面を蹴り、リンはアルを突き飛ばした。水竜は一気に力を解放した。

「くっ！」

とつさに楯を構え、直撃を外す。ギリギリでの防御のため、足の踏ん張りが聞かず、吹っ飛ばされてしまう。

その先は、地底湖。

「うぷっ!？」

ギヤウアアアアアアッ!

「て、ちよっ!？」

水竜はリンに狙いを定めたのか、地底湖に飛び込んでくる。大きな波が起こり、リンの体が遠くに運ばれてしまう。

「リン！」

アルの声が、洞窟内の空気を震わせた。まるでその声が合図だったかのように、ガノトトスがリンにその眼で照準を合わせる。かばり、と口が開く。

シユゴオオオオオオオッ

波のような物が一直線に、リンに襲いかかってきた。

「水中で水ブレスとか反則でしょっ!」

銃槍の楯を目の前に突き出す。

針の様に細い、高圧の水ブレスが楯の表面で弾けた。ダメージは無いが、その圧力で吹き飛ばされる。

「んぐっ!」

背中に岩壁がぶつかる。

カイイイイイイインッ

音爆弾の高音が、衝撃波となり地底湖の水に波紋を作り出した。

水竜は悲鳴を上げながら、水中を飛び出し、身をくねらせる。

どごおん、とハンマーを振るう音をバツクに、アルの声が聞こえてくる。

「さっさと出てこおい! っつと」

「吹っ飛ばされた事の心配はないんだね……………」

苦笑しながら、ばしゃばしゃとクロールで地面に近づいていく。

「……………罾を仕掛けた。早く」

岩の上に手をついて、上る。イーオスシリーズが体に密着して、気持ち悪い。ただでさえ、洞窟内は寒いのに濡れた鎧のせいで、その寒さに拍車がかかっていた。

「ガノトトスめ！寒いじゃない！責任取りなさい！」

その声に反応した水竜が、リン目掛けて突進してくる。リンもその巨体に走り寄っていった。

リンの体が、水竜の巨体にのまれるその刹那。

ギヤウアアアアアアアアアアアアアアアアアツ！？

一瞬で体に麻痺毒が回り、痙攣する。ゲネポスの麻痺牙が仕込まれたシビレ罨が、ガノトトスの巨体に反応したのだ。痺れ、震え続ける巨体に駆け寄る。

穂先の届く範囲に近づくと、討伐隊正式銃槍をぬきはなった。その穂先を、水竜の体に押し付けると、柄の紅いボタンを押した。

「RYU

穂先に仕込まれた機関が、熱を集め始める。

「GEKI

銃口から白い光が漏れる。煙が立ち上り始める。

リンは、低く腰を落とし、岩盤に足を踏ん張った。

「

HO

！！！！！！」

その叫びとともに、銃槍の先が咆哮を上げた。

飛竜のブレスの如き、高熱が噴き出る。水竜の強固な甲殻を、いとも簡単に溶かしていく。

その爆音の響きが洞窟の中から消えた瞬間、水竜の体から、力は完全に抜けていた。

「なあ、リン。その叫び、どうにかならないのか？」

アイアンストライク改を背負い終えたアルが、剥ぎ取り用ナイフを取り出しながら、リンに声をかけた。

「それ、シリアスな雰囲気ぶち壊しなんだよなあ……………」

その言葉に、リンはキツ、とアルを睨み付けた。

「格好いいじゃん！漫画とかだつて必殺技の名前叫ぶじゃん！ただ

『竜撃砲！』っていうより『RYUGEKIHO

！』っ

ていう方が格好いいし！」

ふっ、とアルは苦笑する。

「それ、読み的には何一つ変わらないんだぜ……………」

とん、とすでに剥ぎ取りを終えたクーラが、アルの肩を叩いた。

「……………帰る」

その言葉に、アルはこくり、と頷いた。

うっ、と唸り続けているリンも、師匠であるクーラにじっ、と見られるとしぶしぶと頷いた。

第十二話：「RYUGEKIHO

」！（後書き）

【キャラクター紹介】サクラ

【武器】ショットボウガン・白

【防具】ハンターシリーズLV5

ライトボウガン使い。常に敬語を使うのは、祖母がとても厳しかったため。しかし、母が破天荒な人物だったため、大胆な事をしたりもする。

### 第十三話：革命的方法……！？（前書き）

こんにちはー！

再び更新が遅れてしまいました。

友達と遊びまくっていたせいですね。

罪滅ぼしとして、その時のクシャルダオラを密林に狩り（上位）に行つたときの話をしたいと思います。

えと、名匠珠を作りたかつたので尖爪を取りに行つたんですね。

仲間は

ブロンズベル以下ベルさん）

龍刀【焰】（以下焰さん）

招雷剣【麒麟帝】（以下雷さん）

封龍剣【超絶一門】（以下俺）

でした。

焰さんだけ、ミズハ真シリーズでしたし、ベルさんが『風圧完全無効』を吹いてくれたので、全員「風圧？ナニソレオイシイノWWW」状態。

しかも俺は、「スタミナ減少無効【大】」をベルさんが吹いてくれていたおかげで、常時鬼人化状態。

「うはWWW鬼人化WWW乱舞レンダーWWW」とか喚きながら、横から乱舞しまくっております。

ほら、クシャルつて隙大きいじゃないですか。尻尾ふり無いから、吹っ飛ばされないし。

風ブレスの際に脇に潜り込んで、乱舞しまくれる訳ですよ。

攻撃受けそうになると、雷さんが斬り上げで助けてくれましたしね。二分ぐらい、そいつを繰り返すと、クシャルが別エリアに逃げたんですよ。

そこでみんなで「爆雷針祭りじゃWWW」とみんなで爆雷針レンダー。その後「閃光玉づけじゃあああああ！！」と閃光玉投げまくって

乱舞。

すると三個目あたりで、雷さんの溜め三斬りで角が吹っ飛んでいきまして「わ〜い」と尻尾に乱舞を決めると、尻尾も吹っ飛び。

経過時間十分で「うお！もうそんな削れたの！？」とか、びっくりしたベルさんが叩き付け@焰さんが気刃斬りでトドメを刺しました（どっちがトドメさしたかは分かりませんが、報酬画面でも同時でしたし）。

結局、尖爪は1個しかでず、名匠珠は作れませんでしたけど………。

あはは………、俺、何してるんだろう………。

こんな所書いてる暇があったら、本編書けよ………。

こんな馬鹿の書く小説ですがどうぞこれからもよろしくおねがいます。

### 第十三話：革命的方法……！？

「ちーす、ナゼル！遊びに来たよ！」

安穩としたリユート村の空気を、大声が振るわせた。

「おいこら、いま何時だと思ってるんだよ」

毛布から這い出したナゼルの顔を見つめて、ぱちくり、と瞬きするリン。何の逡巡も無く答える。

「午前六時だけど？」

「分かつてるなら黙れやあつ！」

「ぐふあつ！」

ナゼルの怒りの叫びと共に放たれた、捕獲用麻酔玉。

近距離から放たれたそれをリンは軽々とかわし。目標を外した麻酔

玉は、後ろで眠そうに目をこすっているアーノに命中した。

哀れなハンマー使いは白い煙の中、夢の国へと旅だつていく。

「でさ、ナゼルにプレゼントがあるんだけどさ」

まったくこりない銃槍女は、大声で話を再会する。

「あー……。そいつを置いてとつと帰れ」

コイツに常識は通用しない、と思ったのか、ナゼルはその言葉を発すると同時に、毛布の中へ潜り込み始める。

「じゃ、ここに置いてくね」

ん？妙に物わかりがいい、ナゼルが違和感に気付く。が、時すでに遅し。

「じゃね！」

どすっ、とそれは鈍い音を立てて。ナゼルの頭に振り下ろされる。

「ぎゃっ！ぎゃばあああつ！！」

なにやら重い物の詰め込まれた袋を、頭部に叩き込まれたナゼルは悲鳴を上げる。たかが、袋と侮つてはいけない。昔ギルドでは、袋に砂を詰め込んだ《ブラックジャック》という武器が開発されていた程なのだ。

「殺す気かッ！」

涙目での、ナゼルの抗議。

それを受けたのは、リンの背中ではなく、閉じられた木の扉。

「また、こられたら大変だ」

にじむ涙を毛布で拭くと、鍵を閉めるべくドアに近づく。

「ごめ〜ん、忘れ物！」

ぐしゃり、勢い良く開けられた扉は、ドスファンゴの突進すらも凌駕する勢いだっただけという。

袋による一撃で消耗していたナゼルは、扉によって宙を舞い。華麗にヘッドスライディング。

リンは、絶賛爆睡中のアーノを背負うと、ナゼルの体を揺する。

「ナゼル？大丈夫？」

その言葉に返事はない。

「……………へんじがない。ただのしかばねのようだ」

ぎい、と、未だに建て付けの悪いドアは閉まった。

「で、お土産って何？」

ナゼルを助け終えたシイナが、事の顛末を聞き終え、言った言葉はそれだった。

「いや……………。よくわかんないんだけどさ」

そう前置きをすると、皮の袋の紐をとく。

その中身を見た、シイナの顔色が変化する。

「これは……………ガノトトス？」

「え？ガノトトスの肉なのか？」

袋の中には、焼けた肉。しかし焼けているのは一枚だけのようである。とめくると、生臭い匂いが噴き出してきた。

「この焼け方から見ると、飛竜のプレス？それにしても、火力が弱い……………」

シイナは肉を、持ち上げると何やらぶつぶつ呟いている。

「たく、リンの奴……………。嫌がらせか？」

「それは違うよ」

ナゼルが愚痴をつこうとした瞬間、飛んでくる制止の言葉。

「ガノトトスは普通の魚にくらべ、良い物を食べているからね。脂が結構多いんだ。だけど大型モンスターだから、なかなか市場に出回らない。結構な高級品なんだよ。それにこれは、その中でも脂が多い『ガノトトロ』と呼ばれる部分」

ふうん、とナゼルが返事をする、シィナは再びぶつぶつ言い始める。

「火力の面から見ると、肉焼きセット以下、ブレス以上って所だね。でも、表面から見ると、一瞬しか火が通されていない……………。なのに、内側までしっかりと焼けている。こういう焼け方は、ブレスの特徴だよな……………。あっ！もしかして竜撃砲？」

ぼん、と手を叩く。どうやら理解をしたようだ。

「で、コイツは美味しいのか？」

目下の所、一番重要なのはそこだ。

美味しく、安く食べられるのならば、理屈なんてどうだっていい。

「うん。竜撃砲での調理なんて、リンさん良く考えたね。これは、長く焼いた時のメリット…………。中まで火が通っているのに、デメリット…………。細胞破壊が起きていない。とても美味しいと思うよ。他の肉も、まだ鮮度が高いしね。氷結晶が加工してある袋のおかげかな？」

その最後の一行に、ナゼルの怒りがぐつくつと。

「アイツ、鉾石入りの袋で人の頭ぶん殴りやがったのか……………」

怒りのあまり、右手が震えるナゼルをよそにシィナが、元気良く袋を突き上げる。

「さて、宴会だッ！」

アイルーキッチン。

そこにある大きなテーブルには、四人と一匹。  
その中心には、空の大皿が置かれている。

「何で、空なんだニヤ？」

空腹の余り、ふるふる、と震えるアイルー、ファル。それもそのハズ、只今の時刻は三時。アイルーキッチンを借り受けるために、なんだかんだと話し合いをしていたせいで、時間が経ってしまったのだ。

そんな文句を受けてシイナは、

「では、今から調理を始めたいと思います！」

ファルは思った。コイツに『計画性』の三文字はねえ。

「まずは、ここに肉をセットして……………っ」と

シイナが取りだしたのは、肉焼きセット。本来火がくべられる穴の部分に、金属筒がセットされている。

がちり、と上部の又の部分にガノトトスの肉をセットした。

「ほいっ」

紐を引くと、筒が紅く光り始める。

パコオオオオオンッ

次の瞬間、爆音が弾け、炎が噴き出した。

又の中心部に固定されている、切り身が跳ねる。

「はい！これが『ガノトト口の竜撃砲炙り』！」

その言葉を聞いた瞬間、端でパーティの様子を眺めていたキッチンアイルー達がざわめいた。

「なっ！？攻撃方法で調理をするニヤど！？」

「竜撃砲など使ったら、焦げてしまわニヤいのかニヤ？」

「大体、竜撃砲での調理じゃ、筒が保たニヤいのでは！？コストが、とてもかかってしまうのニヤ！」

そんなアイルー達の叫びを、受けたシイナは、全く動じない。それどころか、「ふっ……………」と余裕溢れる笑みをこぼした。



白い陶器の大皿から、スプーンでグラタンをすくいだすと口に運ぶ。  
「……………何イツ!?これは……………この、隠し味は……………、氷樹リン  
ゴ……………?」  
「むうつ!?何故、それをツ!?コイツ……………出来る……………ツ!?!」  
と、格ゲー状態のオステイ&シイナ。  
キッチンには更なる騒乱に包まれていく。

第十三話：革命的方法……！？（後書き）

【キャラクター紹介】 ファル

【武器】 大骨ピツケル

【防具】 マカライどんぐりメール

唯一ガードできるため、囹的な役割を担うことが多い。が、集中力というものが皆無なので、よそ見している所に攻撃を喰らってしまう。しかし、異様なほどの打たれ強さで、戦い続けるので、村ではゾンビでは無いかと噂されている。

#### 第十四話：「」利用は計画的に」（前書き）

今回、かなり文章が滅茶苦茶になっております。  
え？何故か？

財布消えたのですよorz。

大した額は入っていないかったですかね（千円程度）。自転車の合  
い鍵とか付けてたし……。おかげで『ハンター大全G』買えない  
し……。

多分「と禁SS2」を買ってきた時に無くしたのだと思うのですよ  
……。ずっと入荷してくれなくて「よっしゃ！」とか喜んで読ん  
でいたから……。親にバレたらしばかれる……。  
皆さんならどうします？

と、まあこんな作者の小説ですが、評価、感想お待ちしております

m ( ( ( m

#### 第十四話：「」利用は計画的に」

「げぷ」

ナゼルは、アイルーキッチンのテーブルに突っ伏して、げっぷを漏らした。

「もう、動けないです……………」

と、呻くのはサクラ。いつも姿勢がいい彼女は、椅子の背もたれに完全に体を預けきっている。

「何イ、みんなアモウ食べられニヤいの？だらしが無いニヤア」

明らかに壊れ始めているのは、ファル。小さな眼は、完全に据わっていた。

「……………」

狂気じみた沈黙に包まれているのはアーノ。

もう色々とやばいリユート村のキッチンであった。

「くう……………、負け、たニヤ……………」

「いや、なかなかの腕前だったよ……………」

それもこれも、シイナVSオスティの料理対決のせいだった。

「だけど、隠し味がすこし薄かったかな……………」

その過程で作り出された料理は、すべてナゼル達の腹に消えていた。最初の方こそ「やったぜ！美味あああッ！」とか、喜んでいたのだが、食べても食べても料理は減らず、ただ増え続けるばかり。当然、人間の腹という物は、入る量が決まっている物で。胃袋が膨れていくにつれ、「うぶ、もう駄目エ」。しかし、時が経つと共に、料理対決は激化し、作り出される料理も肉などを使った重い物に。

「し、師匠と……、呼ばせてくださいニヤア……」

二人の間には『師弟関係』が。ナゼル達には『猛烈な吐き気』が生まれたのだった。

「も……ものすごい対決でしたニヤア……」

感嘆に震えるキッチンアイルー達。

「全く形にとらわれない料理の数々でしたニヤ……。特に『龍頭、龍足、幻獣チーズの包み焼き』なんかは凄かったですニヤー」  
「高級料理の部では『眠鳥の昏睡手羽先』が飛び抜けていましたニヤ」

「いやいや『盾蟹の黄金芋酒蒸し』ですニヤ」

「『桃毛獣の桃色ステーキ』も捨てがたいですニヤー」

たくさんの料理を見た、キッチンアイルー達はザワザワと、意見交換をしている。

そこで、ふわり、と一つの疑問が生まれた。

「……………そういえばこのお金って誰が払うんですニヤ？元々、ガノトト口を料理する宴会だったので無かったですかニヤ」

「……………、あ」

ぎゃアアあああああああッ!?!と頭を抱え悶絶するシイナ。

「高級料理を作ったのは、全部シイナさんですニヤ。ボクが使ったのは、ギルドから支給を受けている食材だけですニヤ」

更に、オステイから追い打ちを叩き込まれ、白目を剥くシイナ。と、シイナが頭を抱えて悲鳴を上げていると、村長が現れた。

「高級食材のストックが無くなった、と聞いたのじゃが……………。誰が使ったのじゃ?」

その言葉を聞いた瞬間、アイルー達の視線がシイナに突き刺さる。視線の行方を確認した村長がニコリ、と笑う。

「金払ってくれるよな?」

「え、いや、防具注文してるせいで貯金無いし」

村長のこめかみがピクリ、と動いた。

「払うよな?」

「でも……………」

そう渋った瞬間、村長の体から殺気が噴き出した。

「払えや、ああんツ!?!テメエ舐めてんのかア!?!いてまうぞ、コルア!?!」

手に持った杖をシイナの喉元に突き付け、恐喝を始める。

「すみませんでしたアツ!? 本当勘弁してくださいさアアいつ!」

「いやいや、テメエ謝って済むならよ、ギルドナイトいらねえんだよ! 腎臓売ってでも、金稼げや、ん〜?」

そうですね、人間の腎臓って二つも要らないらしいですよ、とサクラが間違った豆知識を披露する。

「いやアアアアアツ!? やめてエ! 人体売買は、ギルドで禁止されてるでしょオツ!?!」

「え、そうなの?」

キョトン顔の村長。氣勢を削がれたように見えたが、再び唾を飛ばして叫び始める。

「じゃあ、クエスト行って来いや! 死んだら、テメエらの金、全部もらっからなア!」

て事で、やって来ましたフルフル討伐

「お披露目が、借金返しのクエストかぁ……………」

残念顔のシィナ。その体には、陽光に照らされ赤く輝くクックシリーズが纏われている。

「そいつを作っていたせいで、金が無かった、ってわけか」

納得顔でアーノが頷く。

「人間は面倒だニヤ」。アイルーならいちいち防具を変えなくてもオーケーだからニヤ」

そう呟くアイルーに、シィナが羨ましそうな目を向けた。サクラが、じいっ……………、とシィナのクツクシリーズを見据える。

「???どうしたの?」

「いや、何でもありません(新しい防具、私も欲しい……………)」

はあ、と溜息をついたサクラにシィナが首をひねった。

「お・ま・え・ら・はアツ!手伝うという事を考えられないのかなアアアアアア!」

ガゴン。支給品ボックスの蓋を勢い良く閉めた音だ。

その音を聞いて、初めて気付いたという様にシィナが支給品ボックスの方向を向く。

「……………ああ、ナゼル。ご苦労」

アーノは、テメエなんだその態度はア!、と喚くナゼルを羽交い締めにして言う。

「まあ、今日は天気が悪いようだからな。吹雪にならない内に行っちゃまおうぜ」

シイナも、その言葉に頷くと、ナゼルが用意した支給品の袋を掴むとベースキャンプから一歩と、シイナはダツシユでベースキャンプの中に飛び込んできた。

「うわぶっ、どうした!？」

後ろから続こうとしていたアーノが、驚き声を上げる。

「す、すぐそこに……。うええ……………」

ん?と首をひねったアーノがベースキャンプから顔を出すと

「うわ!」

やはり同じ反応。

「その池で白い飛竜                      フルフルでいいのか?そいつが水を飲んでるぜ」

「ほう……………探す暇が省けましたね」

そんな事を呟くと、サクラはクツクレイジに弾丸を装填した。いやいやながらも、シイナもスノウワンドに攻ノ珠【弐】を装填する。

「って、待てい!サクラ!今、新しい武器になってたじゃねえか!」  
防具羨ましがってたくせに、武器はちゃっかり新調してました、はい。

「別にいいじゃないですか」

ナゼルの文句は、自然にスルー。

「それどころじゃないよお………………。あんなのと戦つのお？」

シイナも、さっきからぶつぶつぶつぶつ、呟いている。

「はいはい、さっさと行こう」

アーノがシイナの背中を押した。

「先に行かせてもらいますね」

のたのた、亀のごとく歩いている二人をサクラが追い越す。  
その姿が、ナゼル達の視界から消えた瞬間、

「きゃあああああああああああああッ!」

悲鳴。

「どうした!？」

そんな事を叫びながら、ナゼルはとっさに飛び出す。

その視界に飛び込んできたのは、太陽に照らされた首が長い飛竜フルフルと……………。頬に片手を当てたサクラ。頬に一撃でも受けてしまったのだろうか？

「なんて可愛いのお!？」



フガ、フガ、フガ

フルフルは鼻をひくつかせ、狩人達の居場所を調べ始めた。その動作を見たサクラとシイナが悲鳴を上げた。前者は喜びで、後者は嫌悪の叫びだが。

「キモおツ！」

サクラと正反対の言葉を叫びながら、シイナはフルフルの頭部目掛けて攻ノ珠【弐】を発射。ドスリ、と空気が圧縮された衝撃波が突き刺さる。

「はあああああああッ！！！」

ナゼルは右側から、鉄刀【神楽】を叩き付けた。左側からは、アーノが斬り込んでいるハズだ。ズムツ、と普通の飛竜を斬り付けた時とは明らかに違う斬撃音が響いた。太刀の柄から伝わってくる感覚も明らかに違う。

「何だ、これ？」

フルフルのブヨブヨした皮は、刃を弾き返すことはない。しかし、その柔らかさをもって衝撃を和らげてしまうのだ。

「やりにくい……………」

相当な力を入れて斬り付けなければ、皮を切り裂く事が出来ない。連撃をつなげる事も難しそうだった。

「これニヤら、そんなの関係ないニヤッ！」

フルルは、小タル爆弾を取り出した。狙いは、フルルの頭部。それは命中した瞬間爆炎を上げ、フルルの白い皮を焼く。

ブオウアアアアアアアアアアアツ!?

苦手としている火の攻撃を受け、フルフルがのけぞった。

「かわゆすぎますう!」

歓喜の声を上げながら、クックレイジから徹甲留弾を発射するサクラ。

火に巻かれたフルフルは、煙の向こう側からサクラに狙いを定める。

ブルオオオオオオオオオウツ!

白い巨体が飛び上がった。その圧倒的な重量を持って、狩人を肉片に変えようと。

普通はその正面から逃げる所だが、サクラはフルフルへ向かって走り寄る。

「ちょ……………!?!」

シイナが、小さく悲鳴を漏らした。

しかし、高く飛び上がったフルフルの下には、一人が入れるほどの隙間が生まれていた。

その隙間に、サクラは前転をして潜り込む。

ブルオオオオオオオオツツ!!

サクラの背後に、フルフルが勢い良く着地した。  
その大きな隙に、サクラは振り向きつつ、狙いを定め徹甲留弾を連射。

「オオオオオオオオオオオオオオオオオオツ!!」

雄叫びをあげ、一気に距離を詰め、アーノが両手の刃で突きを放った。体重をのせたデュアルトマホークでの突き。この攻撃なら、フルフルの皮を容易に貫ける。

グルウオオウウウウウウウウウウツ……………

その攻撃を受けたフルフルがうなり声を上げながら、体から蒼い光を放ち始める。

「しまっ……………!?!」

蒼い光。稲光に酷似した閃光。それはまさに、電撃を放つための下準備。

「アーノさんツ!!」

蒼い光の隙間に割り込んできた声  
と、銃弾。それはフルフルの体につきささり、爆発を起こす。その爆風にあおられて、アーノの体が吹っ飛ばされた。

「徹甲留弾かツ!!」

その爆風が消えた瞬間、希白竜の体から電撃が走り、空気中の塵を弾き飛ばす。

「少しは衝撃受けたかもしれませんが、電撃モロに受けるよりかはマシでしょう!」

吹き飛ばされたアーノが受け身を取り、起きあがった時にはフルフルはすでに放電を終え、アーノを睨み付けていた。

ギヤウウオオオオオオツ……………

体の中から再び蒼い光を発し、口元へと集まっていく。その光を練り上げるように、体を仰け反らせていく。

「ブレスか!」

その予備動作からブレスと判断したアーノは、フルフルの正面から逃れるとその白い体へと走り寄る。ブレスは発射後の隙がとて大きい。この隙は、ハンターとして見逃す事の出来ない隙だ。当然、ナゼルも距離を詰めてきている。

「アーノは右に!俺は左から!」

「分かった!」

すこしでも隙を多く使おうと、必要最低限の会話を終えると、挟撃をする様に斜めから走り込む。

ギヤアアアアアアツ!!!!

そう咆哮を上げ、振り下ろされたフルフルの頭。やはりブレスだ、そう確信し口を僅かにほころばせるナゼル。希白竜の口から放たれた、電撃は



咆哮を上げ、勢い良く飛び上がるフルフル。その巨体は高く飛ぶと

ギヤウアアアアアアアアアアアアツツ!?

希白竜は体を貫く麻痺毒に、悲鳴を上げた。その悲鳴を最後に、フルフルは自由を奪われる。

「おし！」

ナゼルは体をシビレで束縛され、動かないフルフルに走り寄る。思い切り体重を乗せて、鉄の刃を振り下ろす。渾身の一撃は、フルフルの皮膚を容易に切り裂いた。突き、斬り上げ、と連撃を叩き込む。フルフルの向こう側では、紅い闘気と希白竜の鮮血が弾けていた。アーノは体の内部からリミッターを外し、体力と引き替えに攻撃力を上げる技、鬼人化を使用し、乱舞をしているのだろう。

「おあああああああああ!!！」

そこまで確認をすると、まるで体を回転させる様に、練気を纏わせた刃を叩き付けた。気刃斬りだ。右回転、左回転、そして第三の型に入ろうとした瞬間、シビレ罠が爆ぜる。罠の効果時間が切れたのだ。

ブルウオオオオオウ……………

麻痺が解けた瞬間、フルフルは体から蒼い光を放ち始めた。先程、アーノがギリギリでかわした技、体内発電の下準備。

「ぐうッ……………!？」

もはや刃を振る動作に入ってしまったナゼルの体は止まらない。先のようにサクラからの援護は入ってこない。徹甲留弾は撃ち尽くしてしまったのだろう、先程まで撃っていたのは火炎弾。その弾では体を吹き飛ばすことなどできはしない。

グルウアアアアッ!!

その咆哮が合図だった。体の中に溜め込まれていた蒼い光が、周囲へ勢い良く放射される。電撃はその効果範囲内にあった物全てを、アーノもナゼルも平等に薙ぎ払っていく。

「「「ごああああああああアッ!？」」」

凄まじい衝撃がナゼルの体を駆け抜けた。

## 第十四話：「」利用は計画的に」（後書き）

【キャラクター紹介】リン

【武器】討伐隊正式銃槍

【防具】イーオスシリーズ

マグニ村の幼なじみ。突然出てきた訳じゃありませんよ？プロローグでさりげなく名前だけ登場しております。性格的なモデルは、某涼宮の憂鬱のハルヒさん。

第十五話：嵐の夜に走る稻妻（前書き）

今回から、場面の切り替え時に『 』などを入れるようにしました！

べっ、別に感想書いてもらったって、嬉しい訳じゃないんだからね

っ！（釘宮ボイスで

あ……………男のツンデレなんて要りませんか、そうですか……………

## 第十五話：嵐の夜に走る稲妻

意識が飛んでいた。

ピタリ、と額をぬらす感覚に意識がゆっくりと戻ってくる。

(……………、う)

意識と同時に記憶も復活していく。

(フルフルの電撃を受けて……………)

記憶の確認を終えると、目を開いた。

そこに有るのは、ベースキャンプの天井。差し込んでくる光から、察するにすでに夕方の様子だった。

「ナゼル？」

その問いかけと共に、シィナが顔を覗き込んでくる。

「ああ……………、どれくらい経った？」

「ん、もう陽が沈むとこ」

そうか、と返答をしようとした瞬間、体に激痛が走った。

再び、視界が真っ暗に染められる。

目をもう一度開いた時には、天井はランプの灯りに照らされていた。

「夜……………」

そう呟くと、指先を動かしてみる。もう痛みが走る事はない。

「まあ、まだ陽が暮れて一時間程度だけだな」

ナゼルの呟きに、アーノが言葉を返した。その声は若干かすれているものの、ダメージを感じさせる事は無かった。

「お前は、大丈夫なのか？お前も電撃受けたよな？」

「おう、もう大丈夫だが……………。さっさと狩らないと時間無くなってしまうぞ？」

ギルドの定めた狩りには、規定がある。一定の時間以内に狩りを達成することが出来なければ、このハンターには狩りの達成が不可能だとみなされ、依頼を失敗という事にされてしまうのだ。ちなみに今回の狩りの規定時間は、二十四時間。一般的な狩猟クエストの標準規定時間と同じだ。

「今はまだ、六、七時間は余っているが……………。即座に狩れるわけでもないだろう？」

その言葉には、確かに一理ある。フルフルは、大型モンスターだ。いくら四人と一匹で戦うとはいえ、たかが三十分や、一時間で狩れる相手では無い。だが、万全の状態で挑まなければあつというまにその電撃で消し炭に変えられてしまうだろう。

「ん？そういえばファルはどうした？サクラも見えないな」

昼にフルフルと交戦した時に、小タル爆弾を投げたところから、

その姿を見た記憶が無い。

「ああ、ファルはね。何か変な感じがすると言って、山頂の方に調査に行ったよ」

「ふむ……………」

妙に遅い気もするが……………、ファルはアイルーだ。もし大型モンスターと出会っても、地中に逃げ込めば大丈夫だろう。

「ファルは大丈夫だよ。さっき、けむり玉での合図があったから」

「じゃあ、サクラは？」

問いかけるとシィナはベースキャンプの屋根の上を指さした。

「あそこ」

そこをナゼルが見ると

「うふふ……………。美しい……………」

そんな声が聞こえてきた。

「後半は真面目になってたじゃん？その分を補充しているらしいよ」

「……………」

複雑な顔になるナゼル。その一連の動作を見ていたアーノが眉をひそめた。

「早くしたほうがいいぜ、天気が悪くなってきた」

その言葉に空を見上げると、雲が星を隠していた。完全に空を覆い尽くしていて、今にも雨が降り始めそうだ。

「ああ」

右手を握って、開く。その動きは滑らかとは言い難いが、すでにダメージは感じられない。

「行くっ」

エリア1。

先程まで、希白竜と対峙していた区域。ナゼル達が拠点に退避してから、何時間も経っているというのに、フルフルは未だにそこにいた。

「……………どうしたんだろう?」

ぼつり、とシイナが放った疑問。それを聞き止めたサクラは言う。

「そんな事いいですよ。フルフル様の悲鳴を聞ければいいんですか

ら」

「……………」

複雑な表情になるシイナ。それでも時間が残り少ないと言うことを考慮したのか、腰のベルトからスノウワンドを抜き取る。

フルフルは他の飛竜に比べ、五感が退化している。そのためだろうか、大胆に接近するナゼルに向き直る様子はない。そしてナゼルが、自らの間合いに飛び込んだ瞬間

希白竜の体から、蒼い光が迸った。

(誘い込まれた!?)  
「くうッ!」

振り上げかけた鉄刀【神楽】を、抱くようにして地面を転がる。  
回避を終え、立ち上がったナゼルの背中を雷撃が掠めた。

ブルウォアアアツ……………

人語に翻訳すると『ちィッ!』とでも言った感じだろうか、悔しげな咆哮を上げるとフルフルはバサリ、と飛び上がった。

しかし、それは別のエリアに飛び去ろうという動きではない。  
ナゼル達狩人を、風圧で薙ぎ払い、距離を取ろうという動作。

「着地の瞬間は、無防備になる!狙うぞ!」

ナゼルはアーノと、ファルに指示をとばした。二人は、コクリ、と頷くと希白竜の着地地点へと走り込む。

「おおあああああああつ!」

気合いをあげ、思い切り足を踏ん張った。風圧に吹き飛ばされてしまわぬよう、前傾姿勢になると、大上段に太刀を振り上げる。その刃はしっかりと皮膚を切り裂き、希白竜の肉にまで達した。

ギャウオアアアアアアアアアアアアアアアアツツツ!!!

咆哮。悲鳴では無く、咆哮。一度斬られる程度では、フルフルの体には響いていないのだ。それどころか、反撃のために咆哮でナゼルの体を縛り付けている。

「マズッ!?!」

ここで放電を使われてしまえば、効果範囲外に逃げ切ることは

、ギリギリ行けるか、行けないか、という所だろう。  
フルフルとて、その程度の事を理解する頭脳はある。放電のために、体の中で雷を練り上げ始める。それを視認すると同時、体の硬直が解けた。

「だあッ！」

後方に思い切り、伸び上がるように跳んだ。  
しかし、

つま先が、電撃に包み込まれる。

「があああああああッ!?!」

バトルグリーヴなど何の意味もなさなかった。鉄鉱石などの鉱石で作られた部分が多いため、絶縁性など皆無に近い。

つま先を焼かれ、足に体重をかけた瞬間、激痛が走り抜ける。足裏の感覚が消えていた。

「ナゼルッ!?!」

「引けッ！」

シイナの声と、アーノがナゼルの横をすり抜けた。少し遅れて回復弾がナゼルの体に当たり、内部の霧状になった回復薬を撒き散らす。回復薬の霧を吸い込むと、足先の感覚が少し戻ってきた。

「らあああああああッ!」

鬼人化したアーノがデュアルトマホークで斬り付け、フルフルの注意をナゼルから引き剥がしていった。

ブルウォオオウツツ！！

希白竜は、尻尾、というには少し短い尾を振り回し、周囲を思い切り薙ぎ払った。アーノは素早く地面に伏し、頭の上を尻尾が通り過ぎる形でやり過ごす。

「があ……、ぐうツ……！！」

ナゼルは回復薬グレートを取りだし、一気に煽った。体細胞を無理矢理に活性化させ、傷を塞ぐ特殊な薬とはいえ、飲んでから実際に効いてくるまでは十秒程度のタイムラグがある。その僅かな時間で、ナゼルはある事に気付いた。

(雨………？マズいな)

ポツリ、と頬を濡らす感覚。

それは単純に足場や視界を悪くするだけではなく、フルフルの放つ電撃の攻撃を伝える媒体となってしまう。地面の水たまりを伝わって雷撃のリーチが伸びてしまうのだ。

「うむ………落とし穴、使っとくか」

落とし穴とは、穴に大型モンスターを落とし、動きを束縛する罠だ。掘った穴の内部にモンスターが落ちると、その体を地面に固定された粘着性のネットが絡め取る。

が、雨のせいで土が軟らかくなっていると、ネットを地面に固定する金具が抜けやすくなってしまふのだ。それはつまり、効果時間の大幅な減少を意味している。そのため、雨が降り始めた場合では、ひどくならない内に使ってしまうのが普通だった。

ナゼルは、小さな穴を掘ると杭状の仕掛けを突き刺した。しっかりと固定された事を確認すると上部の紐を引く。杭の内部から勢い良

く、ネットが広がった。このネットが穴に落ちてきたモンスターを絡め取るのだ。

「みんな！」

そう叫ぶと各々がちら、と後ろを確認し、自らの位置取りと罾の座標を確認した。

その瞬間、一瞬だけ攻撃が止む。その一瞬の間隙を付いて、フルフルは勢い良く飛び上がった。

ブルウオオオオオオアアアツ！！

勢い良く飛び上がった白い巨体は、落とし穴のすぐ横に着地した。すぐ横、とはいえ、そこは効果範囲外。落とし穴によって束縛される事はない。

「チィ…………、ギリギリとかやめろよ！」

落とし穴を踏まない様に、穴の周りを走り、希白竜との距離を詰める。

「だあらッ！」

ナゼルはフルフルが、自らの間合いに入ると同時、一気に下段を薙ぎ払った。体勢を低くし、思い切り足を切り裂く。

ギヤウアアアアアアアツツ！？

着地直後の足を踏ん張っていない所に、強烈な斬撃を浴び、フルフルはバランスを崩した。ドオツ、と倒れたのは、落とし穴の方向。体重を受け止めるはずの地面は、パツクリと割れ、白い体を飲み込んでいく。

「いただきますッ！」



ガチリ、と足下の鎖が足にまとわりついてきた。その僅かな音が、雪の積もる洞窟の中に響く。

チィッ、と彼は舌打ちをする。これでは素早く動いた瞬間、足に鎖が引っ掛かってしまうかもしれない。

彼が狩ろうとしている《目標》は、一瞬で狩人の命を奪うほどの相手。僅かに動きが阻害されることが死に繋がる可能性がある。

体を動かし、足下の鎖を端に寄せた。これならば、鎖に邪魔されることはない。

(……………しかし来ないな)

《目標》は、本来狩り場で体を休めることはない。しかしその《目標》の翼は、彼の攻撃によって碎かれ、遠距離を飛ぶことは不可能だった。

(まさか、別の場所で死んでるのか……………?)

そんな事を考えている内に、

バサリ、バサリ、と羽ばたきが近づいてきた。

上方に目をやると、近づいてくる影が見える。

(……………来たか)

ガチリ、と手元の鎖を持ち上げる。力を込めた手に、鎖が食い込んだ。それにも構わず、鎖の先の鉄球を手繰り寄せる。バサリ、と羽ばたく音が一際大きく響いた。

彼の視線の先にあるのは、白い飛竜

フルフルだ。

(チィッ)

その飛竜は、彼の標的ではない。しかしここでフルフルを始末しておかなければ、《目標》の狩りに弊害が発生する可能性がある。ふあさり、と羽ばたきを弱め、フルフルは高度を下げ始めた。その体は傷ついていて、恐らくここで体を休めるつもりなのだろう。

(……………仕方ない)

ドゴオオオンッッ!!

轟音が雪山の洞窟に木霊した。

シィナは頭を掻きむしる。

「うう、どつするの?」

ペイントを忘れていたせいで、フルフルがどこにいるか分からない。目下の所、それが一番の問題だった。

「うん……………、そうとう傷ついていたからな」

「そうですね、フルフル様なら体を休めに行くはずです」

アーノとサクラの意見を受けて、ナゼルが結果を導き出した。

「様って……、まあエリア3に行っている可能性が高いんじゃないか？」

その言葉を聞いたシイナがゴソゴソ、と地図を取りだす。

「エリア3っていうと……、ここからだとな番と、五番を経由していったほうが早いね」

「おう」

棚状の段差の奥にある洞窟に入り、そこからUターンするように洞窟の道を進むと、そのエリアにたどり着く。

エリア3、洞窟の上部に穴があり、そこから飛竜達が入り出す。

この区域は、竜が体を休めるために使われる所だった。

そこに丁度、ナゼル達はたどり着くところだった。

先頭を走るナゼルが蒼い氷の壁に覆われた道を曲がる。と、そこには

「ッ!？」

バツ、と身を翻し、壁に体を沿わせた。

「（どうしたの……？）」

その様子を見たシイナが、声を潜めて問いかける。

「（見てみる）」

その指先を、シイナの視線が追いかける。そこにあるのは

フルフルの死体。

その頭はもの凄い力で砕かれ、炎で焼かれたかのように傷口の周りが焦げている。しかも高いところから叩き落とされたかのように、その体が洞窟の地面にめり込んでいた。

「!?!」

普通、同時に狩り場に入る場合は、そのハンター達の間で取り決めを行う。その会議をナゼル達はしていないのだ。つまりこの狩り場にいるハンターはナゼル達だけだ。

だというのに、フルフルが倒されている。それらが意味しているのは、別の大型モンスターが存在。

フルフルを倒してしまう程の大型モンスター。それがこの狩り場のどこかに存在しているのだろう、もしかしたら今この区域の何処かに潜んでいる可能性がある。

「（退くか………?）」

そうアーノがナゼルに問いかける。その言葉にナゼルが頷こうとした瞬間

「に、逃げるニャ……………」

「ファル!?!」

フルフルの死体の向こう側、大きな倒木のある其処から傷だらけのアイルーが現れた。

「大型モン、スター……………がいる、ニャ」

その瞬間

ふあさり、と羽ばたきが洞窟の空気を揺らす。

「（マズッ……………！？）」

壁の端に、体をかがめる。そんな事をした所で、謎の大型モンスターが降りてきたらすぐに見つかってしまうだろう。

ふあさり、ふあさり、と羽ばたく音が大きくなっていく。それが大きくなるにつれ、雨粒も大粒に変わっていった。

「くうっ……………」

ひとまずは相手のモンスターを見よう、そうしない事には何一つ始まらない。そう考えてナゼルは顔を上げた。

視線の先にあるのは

鋼龍、クシャルダオラ。

四つの足と翼を持つ、最強の古龍。

砂漠でドラゴスを一撃で沈黙させたテオ・テスカトルと並ぶほどの存在。

「（な、んだと……………）」

マズい。古龍を相手にしたら、ナゼル達初心者ハンターなど、それこそ“紙”のように切り裂かれてしまうだろう。

ふあさり、ふあさり、と“死”が翼をはためかせ、少しずつナゼル達との距離を詰めてくる。

もうすぐ古龍はその卓越した視力を持って、ナゼル達を見付け、殺してしまうだろう。

ふあさり、ふあさり。見つかる、ナゼルがそう思った瞬間

ゴドオオンッ！

クシャルダオラの頭が炎を噴き、横にブレた。

右の方向から鉄球が飛んできて、クシャルダオラの頭を強打したのだ。鉄球との衝突の轟音が消えない内に、再び鉄球が上から下へと振り抜かれ、クシャルダオラの胴体を叩き付ける。その鉄球が命中した瞬間、炎が噴き出し、鋼の鱗を溶かした。じゅうじゅう、と熱された鱗が、雨を蒸発させる。鉄球の勢いに負けたクシャルダオラの体が地面に叩き付けられる。

「なッ……………」

圧倒的な、人が触れてはいけない存在であるはずの古龍は、ナゼルの目の前で振るわれたたった二撃によって地に伏した。

それをナゼルが確認した瞬間、ドッ！とクシャルダオラのすぐ横の地面に人影が着地した。上の棚状の通路から飛び降りたのだろうか、あれほどの高さから人は飛び降りられるものなのだろうか。その人影の足下には、先程クシャルダオラを叩きのめした、鎖付きの鉄球が置かれている。そして、何よりも

「……………」

その人影は、ギルドナイトの制服を纏っていた。前と後ろに鍔がある帽子、足下まであるマント、手首まである長袖のコート、ただ一つをのぞいて何一つ変わらない。

ただ一つ違うのは、色。普通のギルドナイトの制服が、炎の様な赤であるのに対し、その服は白銀をしていた。まさに雪の如き白。

その人影は、クシャルダオラの死体に近づく。そして腰から桜色の鉱石を取り出すと、鋼の体にぶつけた。その鉱石は、ガツン、と硬い音を残して跳ね返る。

「……………チイツ」

人影は舌打ちをすると、もう一度腰のポーチに手を入れ、球状の物を取りだした。それを地面に投げつけると、紅い霧が噴き出る。

そして、その霧が晴れたときには、その人影も、クシャルダオラの体も消えていた。

## 第十五話：嵐の夜に走る稻妻（後書き）

【キャラクター紹介】アル

【武器】アイアンストライク

【防具】タロスシリーズ

リンのパーティでのブレーキ役的な人。とにかく不憫。どこまでも不憫。涼宮のキーンみたいな人、としかいいようがない。

## 【真龍に関する報告レポート】（前書き）

え？文字数少な〜よ？

いやいや……………いつもは三千字はあるのに、今回千字ちよいしか無いとか有りませんよ？うん、千百字ちよいしか無いから。千字ちよいよりも多いから。うんうん。

【感想クレクレコーナー】

さあやってまいりました、レギュラーにしてみた感想クレクレコーナー！

今回は【プロント語】をコンセプトに逝つてみたいと思います（何それ？って方は、ググってみると面白いwikiがあります）。

『感想送らない 作者の怒りが有頂天 世界征服 あなた行方不明  
感想送る 作者の喜び有頂天 宙返り 失敗 死亡 征服計画霧散

あなたに彼女（or 彼氏）が出来る』

ごめん、ちょっと逝ってくるわ……………

## 【真龍に関する報告レポート】

これは《真龍に関する報告レポート》より抜粋した物である。

……（前略）真龍とは、竜人族の間に伝わる伝承に登場するモンスターの事である。その龍は、空を駆けるとその後を追うように雷が走り、咆哮すれば火の玉が降り注ぎ、尻尾を一振りすれば津波がまきおこり、その吐息を浴びた村々は一瞬で凍り付いた、と伝承には記されていた。その龍の体は、雪の如き白銀であったそうだが、常に禍々しい黒い光を纏っていたそうだ。この真龍が巻き起こす諸現象に共通している事は、《属性》としてこの現象が存在していることである。

……（中略）この属性というのは、モンスターが一つずつ持っている物だ。例えばリオレウスは《火属性》、フルフルは《雷属性》、という風にだ。ただ例外的に古龍は二つ属性を持っているようだ。例えば、テオ・テスカトルは《火属性》《龍属性》、クシャルダオラは《氷属性》《龍属性》だ。これを《特徴属性》という。この《特徴属性》とは、以前シュレイド大学でその存在が提唱され、存在が確認されているので、それに関する考証は割愛する。

……（中略）以上の情報から、真龍は《特徴属性》を五つ持っていると推測される。《火属性》《雷属性》《水属性》《氷属性》《龍属性》の五つだ。他のモンスターが自らの《特徴属性》を使ってプレスを放つたりするように、この真龍も《特徴属性》を使い村を蹂躪したと考えられる。

……（中略）この竜人族の伝承についての信憑性は、かなり高い物だ。竜人族の情報伝達技術は、とても高い物である。その証拠と

してあげられるのが【龍】。ギルドが古龍を、認識する以前から、竜人族は【龍】についての情報を持ち、ハンター達に助言をしていたそうだ。また現在ギルドが調査に乗り出している新種、水棲龍などについても、竜人族の伝承にあり、この点から見ても竜人族の記録は信用するに足る物だと思われる。

……（中略）伝承の最後は「ソノ力、危険ニ尽キ封ズル事を決定。カヲ分割シ、《珠》ト成シタ。残サレタ四ツノ力、自我ヲ与エル事デ、《珠》ノ番人、龍ト成ス」と締めくくられている。この記述を信用する限り、真龍は《珠》という歯車<sup>パート</sup>に分解され、更に四つの属性を使った龍に守られている。この《珠》という歯車<sup>パート</sup>は、《精密属性値による自然現象への干渉》によって提唱された、《龍属性》の核となる素材、《龍珠》との関連性が推測される。この《番人》とは、おそらく古龍の事だろう。この《龍珠》を体内に保有するため《番人》である古龍を倒さなければ、《龍珠》を手に入れることが出来ない。ここから、古龍から《龍珠》を集め、何らかの刺激を加えれば真龍を復活させる事が可能、という逆説が立てられる。

【真龍に関する報告レポート】（後書き）

【キャラクター紹介】クローラ

【武器】パワーハンターボウ2

【防具】レイアシリーズ

リンの師匠。無口。長門みたいな人。裏設定とか、ありそうだけど無い。今、気付いたが、リンのパーティ全部ハルヒキャラじゃんw、古泉と朝比奈さんも出さねばw w

## 第十六話：裏で動く者（前書き）

ごめんなさいいいいっ！！

前回更新から一ヶ月も間が空いてしまいましたあぁっ！！

ブログなんかやってんじゃねーよ、俺！

インフルエンザとかかかってんじゃねーよ、俺！

期末前だからって朝から晩まで勉強とか、ガリリすぎだろ、俺！

てか何だよ、うちの学校！

中間の後、一ヶ月足らずで期末とか何なの？ 馬鹿なの？

その上、期末後、二週間足らずで実力テストって何なの？ 死ぬの？

しかも何？ このラノ発売とか俺を誘ってるの？

期末前なのに一位の『バカテス』一気買いしちやったよ？

どうすんの？ お財布が寒いよ？

…………… すいません、錯乱してしまいました。

ここまで言い訳しか書いてないですね、すいません。

しかも一ヶ月とか開いていたくせにクオリティ滅茶苦茶低いです、すいません。

どのくらい低いかっていうと、『このライトノベルがすごい！』の一位に『ハリーポッター』が選ばれる可能性ぐらい低いです。ゼロです。そもそもライトノベルじゃありません。

…………… 本当、すいませんでした

…………… あれ、間違えた。

感想クレクレコーナーは、友人から「自重しろwww」と言われたのでやめますね。さすがに調子乗りすぎでしたorz。

## 第十六話：裏で動く者

危機感。

焦り。

そんなものだけが頭の中を埋め尽くしていた。

『龍索』、竜人族の中でも一握りしか使えない能力が示している場所に確かに送り込んだというのに。

砂漠は確かに仕方がなかったかもしれない。

あの炎王龍は、街から体力回復のために逃げてきたのだから。

しかし雪山はどうだ。

鋼龍は怪我を負っていたのか？

万全の状態ではなかったのか？

いや。

例え怪我を負っていたとしても、ただの新米ハンターが、古龍を退けられる筈がない。

ただの新米ハンターでは。

やはり危険。

排除すべき。

とはいえ。

彼女が記憶を取り戻した結果、こちら側に付く可能性。

それは決してゼロではない。

そうなった場合、有効な戦力  
いや、勝負を分けるカードになるだろう。

だが危険。

それでも。

思考は泥沼へと陥っていく。

馬車に乗ること三時間。

ナゼル達はリユート村にたどり着いた。

「ううん……長かったなあ……」

シイナは目をこすり、ガタゴトとあちこちに体をぶつけながら降りてくる。

「お前……」

一番奥に座っていたナゼルは大あくびをしているシイナを呆れた目で見た。

「寝ていたじゃありませんか」

サクラからの的確な突っ込み。ちなみにサクラの座席はシイナの前。馬車内の席は、向かい合わせになっている。

「……なあ、手伝ってくれないか？」

これは全員分の荷物を持たされているアーノの声だ。基本的に男子が荷物を持っているのだが、今回ナゼルは怪我をしているので一人で持たされているのである。

彼の座席は当然ナゼルの前。

「……ゴふっ」

血でも吐いたんじゃないか、という声を上げるフアル。

彼は今回、山頂でボコられて帰ってきたため、『床』である。

「怪我をしているかなど関係ない。一番偉い奴が良い席。つまり、狩るか狩られるか。それが狩人　いや、自然の掟」

「何で!?　どうしてそこから『殺るか殺られるか』につながるんだ!?」

「あは、何でもないよ」

ナゼルの全力突っ込みを完全にスルーするシイナ。  
そんなふうにはギヤアギヤア騒いでいると、

「皆さん、元気そうですね……」

古龍観測所の見習いさん（助けられてきて住み着いた）ルイがやって来た。

「あら、ルイさんじゃありませんか。どうしました?」

そうサクラが問いかけると、ルイは

いやね、ここ　つまり、このリュート村からでも気球は飛ばしてるんですよ。雪山に、だけですけどね、と前置きし

「観測隊の人が『クシャルダオラが出た!』って戻ってきたものですから、様子を見に来た次第です」

「……ルイはいい人だニヤァ……」

古龍にボコられ、しかし何の心配も

心配どころか、逆に邪

険に扱われたファルが声を漏らした。

「お、そういえばファルさん、ボロボロですね。龍にやられたんですね？」

その問いかけにファルが頷くと、ルイは目を輝かせ　　手帳を取り出した。

「どうでした、風ブレスの感触は？」

様子を見に来た、って心配になって事じゃニヤいのニヤーツ!? とファルの叫びが響き渡った（山間なのでエコー付き）。

「ふむ……、そんな事があったのかい……道理で……」

ルイの怒濤の質問攻撃（設問数、三百二十五）に生け贄として、ファルを捧げる事で脱出したナゼル達は、リユート村の村役場に来ていた。

シイナは、無事が嬉しいのだろうか明るい顔の村長に問いかける。

「そうなんです、それでそのギルドナイトに覚えはありませんか？」

ここが一番肝心な問いだ。

いくらギルドナイトといえど、ハンターが居る狩り場に勝手に入っ  
てはいけない。

急を要する状態だったとしても、信号弾の打ち上げぐらいはするだろう。

それが無かった。  
そしてなにより

「そのギルドナイトの装束は、白くまかったのじゃろう?」

ああ、と頷くナゼル。

「正真正銘白かったぜ」

「……ふむ、そんなギルドナイトなぞ聞いたことがないのう」

ふうむ、と村長があごを撫でながら考え込む。

と、ぽん、と手を打った。

「考え込んでおっても仕方があるまい。ドンドルマの大老殿に行ってみたらどうじゃろう?」

「いや、追いつ返されて終わりだろ……」

当然だ。大老殿とは、全ギルドを束ねる、いわば国を束ねている城のようなもの。そんな所に、ただのハンターがこのこ行ったところで追いつ返されて終わるのがオチだろう。

「とはいえ、このまま何もしないのも嫌じゃろう? こんな村ではなく、街に行くことで分かることもあるかもしれぬしな」

「むう……」

どこか説明くさい村長の言葉を受けて考え込むナゼル。  
顎に手を当てて熟考しているナゼルに、シィナは言う。

「オババ様の言うとおり、ドンドルマに行った方が良いんじゃないかな？街でしか食べられない、じゃなかった、手に入れられる情報とがあるかもしれないしさ。味覚情報的な意味で」

コイツの思考回路には食い物しかないな。

ナゼルはそうあきらめのため息をつく。

と、サクラも自分の考えを述べようと口を開いた。

「シイナさんの言うとおりじゃありませんか？街でこそ手に入られる物もあるはずです……手錠とか」

「お前は何を買ったつもり!？」

思わず大声で突っ込んでしまったナゼルだった。

ギルドナイトの事はみじんも気にしていない二人に錯乱するナゼルに村長は言う。

「で、どうするんじゃない？」

「……しゃあないな。駄目元つてことで」

しびしび、と言った風に言うナゼルに一同は歓喜の声を上げたのだ。  
った。

街に来る。

龍が来る。

このシュレイド王国で、最も大きな街。  
ハンターギルドの総本山、大老殿の街。

その街に

龍が来る。

## 第十六話：裏で動く者（後書き）

そろそろ人物紹介もハンターの人が居なくなっているので、魔杖の設定でも語ってみたいと思います。

【武器力テゴリ名】魔杖

【武器タイプ】ガンナー

基本的な攻撃方法は《属性攻撃》。

ボウガンで射出するように、《珠》を詰め込み、そこから属性値を抽出することで射出する。

また属性値を組み合わせることで、さまざまな効果を得ることが可能。

たとえば《火属性》で、体の筋肉を暖め、筋力を増強。

《火》による急激な気圧変化で真空状態を発生させ衝撃波を発生など。

更に、スタミナを消費することで属性値を練り上げ、威力を上げることが可能。

ただし代償としてしばらくの間、能力低下を強いられてしまう。

……いま気付いたけど、こうやって書いてみるとチート武器ww  
ww

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n1723h/>

---

モンスターハンター 《龍ノ珠》

2010年10月31日00時11分発行